
Long time no see

azusa

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Long time no see

【Nコード】

N36780

【作者名】

azusa

【あらすじ】

ジャンルはありきたりな異世界召喚・最強主人公・ファンタジーです。

遅筆ですが、御容赦のほどよろしくお願いいたします。

漢字が魔術になる。

そんな世界のお話。

全話を編集しましたが、内容は変わっておりません。

初めての小説投稿です。

到らない点や拙い点への批評がありましたら、お手数ですが、感想やメッセージにてよろしくお願いいたします。

異世界召喚？

吹き抜けるそよ風に、濃密な土の匂いと植物の青臭さが溶け込んでいる。

天高くからは、21年の生涯で聞いたことのない鳥の鳴き声。

そして、極め付けに、屋久島の縄文杉の如き巨木が、視界一杯に飛び込んでくる。

この森には、おそらく樹齢千年以下の木は存在しないのだろう。

つまり、それほど古い森の中に、『僕』はいる。

「……マジ、勘弁……」

山に囲まれた田舎で生まれ育ち、都会の大学に出てきた自分だが、昨今の日本に本当の意味で『田舎』はほとんど無いはずだ。

電気が通り、上下水道が走り、自家用車を持ち、家電無き生活など考えられない。

都会だろうが田舎だろうが、日本ではさしたる意味を持たなくなっている。

……つまり、何が言いたいのかわれれば、いくら僕が田舎生まれの田舎育ちだろうが、大自然の中で生きていけるほど文明離れていない、ということだ。

ここは一体どこなのだろう。

いやその前に、何故僕はここにいるのだろうか。

夢……ならどれだけ救われることが。

少なくとも、この身体を突き抜ける絶望感は二度と味わいたくない。

絶対死ぬ。

絶対、野たれ死ぬ。

周りの環境が言っているのだ。

『お前なんかじゃ、ここで生き残れないよ』

……落ち着け。

サバイバル系の娯楽作品にあるように、冷静になれ。

ならないと、死ぬ。

まず近くの巨木に背中を預け、目の届く範囲を確認。

動物の気配は、無い……と思いたい。

文明に浸かり切った人間が、野生の権化を感じ取れるわけないが、そんなことは言っても思っても仕方ないのだ。

さて、落ち着け。

冷静に、一つ一つ確認する。

まず、『ここ』に来るまでを思い出す。

覚えている限り、自分が『ここ以前』にいたのは、日付で20xx年8月18日。

大学3回生の夏休み。下宿のアパート。

バイトと集中夏期講習の合間休みだったので、朝から寝ていたはず。17日の夜23時くらいに寝て、翌18日の6時くらいに一度目覚めてトイレに行き、何故か歯を磨いて顔を洗って、渴いた喉をお茶

で潤し、またベッドにダイブした。
その二度寝前に、ベッド脇のデジタル時計で日付と時間を確認したのだから、間違いないはず。
で、その二度寝している間に何かしらあって、ここにいるのだろう。信じれるか、二度寝の夢であって欲しい。

次に、自分の服装。
寝巻の黒スウェット。
足↓裸足。

「うわっ！」

だからさつきから痛かったのか。
と、いうか、この大自然の中で裸足は危ない。
田舎育ちだからわかる。

虫、蛇、植物、土に石、動物と、何が原因で足に傷を負って命を脅かすかわからない。
早急にどうにかせねばならない。

持ち物はどうか。

ポケット確認、私有物無し。

涙が出るね、本当に着の身着のままだ。

自分の死ぬ予想がさらに右肩上がりになった。

環境を再確認。

この目の前に広がる大自然は、本当に地球上に存在するのか？
ここまで『人の手が入り込んでいない森』は、世界中に存在している気がしない。

白神山地だって、ここまでの巨木群はないんじゃないか？
というか、ここは日本なのか？

…。
……。
冷静に、冷静になれ。
本当に怖い。
気持ち悪い、怖い。

空を見れば、覆い尽くすように栄える木々の枝。
地面と、その枝の葉、幹の様子から、おそらくこの木々は落葉樹の類。
実家の裏山に生えていたやつに似ている。
ブナ？とかコナラ？とかかな。わからん。

気温はそこまで暑くない。
というより、少し肌寒い。
当り前か。

こういう木々は、熱帯亜熱帯に生える類じゃない。
温帯とか冷帯とかだったように思う。地理は、正直苦科目だった
が。

多分、この森、もといこの環境、『四季』がある。
僕がここに来る前から、意識が覚醒するまでに、ラグがそこまで開
いていなかったと仮定するなら。
まだ夏だろう。肌寒いのは、森の中だから。
直射日光がほばないから、地表面が温まりにくいだけだ。

少しだけ安心した。
予想があつていれば、冬まではまだ期間がある。

ここが日本、日本付近の国々であれば、約3カ月。
ロシアよりなら約2カ月くらいは、時間がある。
冬の寒さの中の遭難は、マジ勘弁。

時刻を鑑みるに、昼から夕の間か？

身体に、電撃が走る。

「火と、寝る場所がある…。」

今日を生き抜かないと、明日を迎えられない。
命を繋ぎとめる作業を開始する必要があった。

異世界召喚？（後書き）

拙くてすみません。

異世界召喚？2

『エス・レス・カーン自衛軍第3百人隊隊長イルヴァーンより、本国へ』

本隊に下された命令に関係すると思われる、重要参考人を確保。

日時：八月三十一日夕刻

場所：ラフェルドナス森林地帯南方、エレス川下流付近

搜索を続ける他の部隊員を招集後、速やかに帰国する。

尚、現時点で我々が得た情報を事前通告。

- 一、重要参考人は外国人。黒髪黒瞳、肌は白。
- 二、名前はセヤ（セーヤか）、年齢は二十一、男。
- 三、武器の類は所持せず。（ただし狩猟用とおぼしき弓矢、石製のナイフを所持していた）
- 四、言語は通じず。共通語・北方語・中央語はもちろん、わが部隊に属する少数民族の隊員の母国語も通じない。

以下の報告は、最重要機密であると思考する次第である。
よって、どうか御考察と判断を仰ぎたい。

重要参考人は、『古代帝国期言語』を使用していると思われる。

以上報告：エス・レス・カーン自衛軍
第3百人隊隊長ザルツ＝イルヴァーン

異世界召喚？3

幸運だったのは、この森で動物の類と出会わなかったこと。
意味するところは、自分を襲う猛獣の類がないということ。
不運だったのは、この森に食物となるべき陸上生物がいなかったこと。

意味するところは、文字通り食べる物がいない。

僕は飢えていた。

もともと小食だったが、それは飽食が許されたかつての場所での話。

手元にある木片に、砕いて磨いた石のナイフで切れ込みを入れる。

『正』の文字が3つ。

森で気がついた日から、15日が経過していた。

初日は、思い出せば本当に苦労した。

焦燥感に身を焼かれ、叫びだしそうになる気持ちを耐えた。

森に何が生息しているかわからないのに、それをおびき寄せたくはなかった。

落葉樹の森。

捕食者は恐らく、熊・猪、日本でないと仮定して、プラス狼か。

よく、熊に出会いたくなければ歌を歌えばいいという。鈴の音を鳴らせばいいとも。

でもそれは、人を知る熊だろう。

こんな、日本か外国か、どこの森かもわからない場所に生きる熊に、その知識があてはまるとは思えない。

むしろ餌の手がかりにされるだけじゃないのかと思う。

熊は100mを7秒弱で走破する。体力も人間の比ではない。木登りもお手の物だ。

出会ったら最後、本当に死ぬ。

猪も怖かった。あれなんかは音で余計に寄って来るだろう。

豚の先祖様は、立派な牙と、体当たりを持っている。

俺の実家で、猟師が猪の体当たりを食らって死んだことがあった。

身長180オーバー、筋肉質で強面、猪や熊を狩っては家に来て、一緒に鍋をする仲の良いおじさんだった。

その人が、しつかりとした装備をしていて、不意を食らったとはいえ一撃で死んだ。

僕のように、身長も低くそこまで鍛えられていない人間などは余裕で死ぬ。

そして一番怖かったのが狼だ。

日本では、固有の日本狼は絶滅した。

だが、狼という種はまだ世界で生きている。

ここが日本ならいい。でも、日本じゃなかったら…？

熊や猪と違って、集団で来る敏捷な個体。

何より、『知識がない』相手は、本当に怖い。

そう思えばこそ、初日の僕の行動は迅速だった。

生き残りたい一心が、怠惰な文明人を急速に退化させた。

靴が無かったので、地面の石を砕いて、それで木の幹を削り取り利用した。

とはいえ、ただの歪な一枚の木の板。

わざと節くれを残して、それを親指と人差し指で挟んで使う。

地面を滑るようにして歩いた。

のろのろとして非常に遅いが、地面に転がる石で足を切り、破傷風になる方が怖かった。

猛獣が出た時、もちろんにべもなく裸足で全力疾走するだろうが、それまではこの歩き方でいい。

土が入り込んでくることだけは解決できなかったが。

初日の夜。

木のうろを見つけ出し、そこに縮こまって、震えながら朝日を待った。

体の芯から、寒さを感じた。

何度も襲われ、食い殺されるイメージに苦しめられた。

靴ずれと、豆ができた足を労わるように撫で、ひたすら朝を待つ。

前述の通り、幸運だったのはこの森に動物の類と出会わなかったこと。

猛獣もいなかったのも、身の安全は確保できていた。

と言っても、単純に自分の通ってきたルート上に生息していなかったただけだろうが。

この森は、多分とてつもなく広く、深い。

自分の通ってきたルートなど、森の全体像からすれば微々たるものだろうし。

それに、落葉樹の多くが木の実を落とすはずだ。

餌が豊富な立地環境で、野生動物がいないわけがないと思うが、出会わなかった事実こそが大事だ。

ありがたかった。

もうひとつ。

幸運だったのは、どうやら自分が最初にいた地点は、この森の端にあたる場所だったらしい。

三日ほど不眠で歩き続けた後、原っぱのような地形に出られた。

見渡す限り、まばらな木々と雑草の平原だ。

気の緩みと、疲れと、不眠。

僕は初めて、声を押し殺してだが盛大に泣いた。

森という閉所から抜け出せた安堵。

森で野たれ死ぬ恐怖から、一応とはいえ脱出できたのだ。

脱水症状に近い身の上だが、それでも涙は止まらなかった。

雑草が無かった森に比べ、非常に歩き辛かったが、それでも森から

抜け出せた安堵で平原の歩行にそれほど苦労はしなかった。

それよりも水が必要だったのだ。

水不足で死ぬ。

干からびて死ぬ。

森伝いに、黙々と歩く。

見晴らしのいい平原に出たが、森からは離れがたかった。

なんとなく、遮蔽物が欲しかった。

歩きながら、喉を掻いて、いもしない神に何度も願う。

川に出会わせてくれ、と。

不眠が限界に達しながら、ここに来て4日目の夕方。
水の匂いを感じた。

ふと、朦朧とした意識を空に向ける。

曇天。

雨だ！

限界をとくに越している身体と精神が、水にありつける歓喜に打ち震えながら。

だけど、本能が告げる。

『身体を冷やすな』

森伝いに歩いてきたことが味方した。

天から水が、盛大に降り始める前に、木々の傘に非難することに成功した。

木々の傘から手を伸ばし、汚れを洗い落しながら、雨水を飲んだ。
むさぼるように、何度も飲んだ。

限界だったのだろう。

そこから、僕の意識はない。

目が覚めた時、雨はもう止んでいた。

一体どれほど眠り込んでいたかはわからないが、地面の湯き方を見

るに、一昼夜か。

以前よりクリーンになった意識を総動員させて、今度は腹を満たすものを探す。

平原の雑草についた露で喉を潤しながら、川を目指す。

動物に出会えなかったのなら、もう魚しかない。

川に出会えなかったら死ぬしかない。

削った木の幹を嚙んで空腹をまぎらわし、川と出会えたのはそれから1日後のこと。

ガリガリになった腕で川の水をすくう。

生水など毒だが、このまま死ぬよりはマシだ。

腹を下すのを覚悟で、川水を嚙下した。

実家にあるような川だった。大きくもなく、でもそれほど小さくもない。

石の丸みから、ここは下流域だろう。

釣りなど門外漢なので、大きな岩に石をぶつけて魚を気絶させる方法で漁をした。

数は雀の涙ほどだが、それでも取れたことに変わりはない。

初めての食事を、久しぶりの食物に喉がむせる中、嚙みしめる。

火など起こせないの、生のまま、身だけを食べた。

生臭さなど気にならない。

ただ、感動していた。

生きる術をようやくつかんで、食事のありがたさに胸を打たれて、ただただ感動していた。

気がつけば、もう15日もたつ。

意識がある時の体感で15日だから、もしかしたらそれ以上かもしれないが。

栄養失調気味だとは思うが、飲み水、食物は確保でき、それなりの余裕は生まれた。

未だに火だけは起こせない。

が、よくよく考えてみれば生魚を食べないとビタミンを補給できないので、むしろこのままの方がいいのかもしれない。

石のナイフで大抵の作業はできるし、今はもっぱら弓を作って一日を過ごしている。

もう一度、森に入ろうと思うのだ。

川近くに自生していた木に、活用できそうな蔓を見つけた時に思いついた。

ナイフと蔓のおかげで、サンダルもどきのような靴ができたのも大きい。

歩行しやすくなったし、動物を探しに森に入ることでもできそうだ。

木の実なんかもあるかもしれない。

弓はまだ完成していないが、心なし順調に、今の環境が好転しているように感じる。

この何処かもわからぬ土地で、僕は生きている。

自信が芽生え始めているのだ。だからこそ、それを生かすのは今だと思う。

「よしー」

不細工だが、試作品としてはまずまずの出来の弓をかがげ、空を仰

ぐ。

「絶対、生き残る！」

それは、自分への激励であり宣言。
日常に帰るために、生き残ってやるのだ。

そう、決心した矢先だった。

「l s j d h f o i y h b d ! ! ! !」

「っ!？」

聞きなれない声……声?!
間違いない、人の声?!

立ち上がる。

自分がある川辺より、何段も高い崖上に、彼等はいた。
こちらを見下ろす、幾人もの姿。

銀色に光る鎧。

手にした槍。

腰に差す剣。

そして、兜をしていないその顔は、どうみても白人のもの。

「……外国？の映画撮影かな……？」

もちろん、それが誤解なのは、もつしばらくしてからわかったが。

異世界召喚？3（後書き）

ようやく次から本編です。

1話 異文化ファースト・コンタクト”表”

「隊長、こちらへ。」

事務的な静かな声で、オルスが私を呼んだ。

目の前には、私の率いる隊員10名に囲まれ、縛りあげられた男がひざまついている。

男の眼には、恐怖と困惑、いくばくかの不安が感じられる。

「h u d g ? k i u s ? ? .」

見慣れぬ薄汚れた衣服に身を包むその男は、私に何か伝えたいのか口走るが、さっぱりわからぬ。

なんとなく、語尾の抑揚で質問してきているのだろうが。と、男の横に立つオルスが、男を槍の柄で打つ。その衝撃でよろける男。

「勝手に口を開くな。」

静かにそう言う。

彼の、いついかなる時も冷静沈着ぶりは評価に値するが、融通が利かぬのはたまにキズだ。

「まあ、待て。暴れもせぬ相手にそれは酷だ。」

「…しかし。」

「だいたい言葉も通じん。言うだけ無駄だぞ。怯えさせたら余計に何をするかわからん。」

「……、申し訳ありません。」

そう言い、一步引く。

うむ、その従順さは加点对象だ。

さて。

私は、男に近づくと腰を下げ、目線を合わせた。
黒髪に、黒い瞳。

十中八九、このエス・レス・カーンの生まれではないな。
というより、この大陸の生まれではあるまい。

広いこの大陸に、黒い髪と黒い瞳の人間など存在しないゆえ、おそらく未知なる何処の大陸生まれか。
奴隷商人から逃げ出してきたか？

…いや、ないな。

いくら奴隷商人でも、大海を渡る船を造れぬ現在、存在すると『噂される』未知の大陸から人など買えぬ。

一番の可能性は、付近の村でこのような突然変異の者が生まれ、忌避され捨てられたか…。

なんにせよ、考えるだけ無駄やもしれん。

「名は？」

「…k j t s j . i y r s a m j t …。」

共通語は、オルスの言うように通じないか…。

続いて、北方語・中央語、我が部隊に属する少数民族の隊員の母国語も試して名前を聞く。

……駄目だ。てんで話にならん。

やれやれ、部下の手前、恥ずかしいが仕方あるまい。
私は自分を指さし、

「ザルツ。ザルツ。」

そう言う。

原始的だが、言葉がここまで通じないなら仕方ないのだ。

と、何かに気づいたように男が目を見開き私を見る。

どうやら、私が名前を聞こうとしていることがわかったようだ。

ふむ。原始人程度の知能かもしれないと思っていたが、存外賢いみたいだな。

「セーヤ（セヤ？）、セーヤ。」

男はそう必死に言う。

セーヤ……？今まで聞いたことのない名付け方だ。やはり、この大陸の生まれではあるまい。

私は満足すると、男の身柄をオルスに託す。

とりあえず、こういった外国人・身元不明人は、本国で調査せねばならない。

言語が通じぬなど前代未聞だから、処刑されるかもしれんが……。

さて、面倒なことになった。

本来、私の百人隊に下された命令は、15日前にこのラフェルドナス森林地帯で観測された召喚魔術とおぼしき魔力の調査。

意図不明で召喚されるモノなど、国家に対し害を成すモノとしか考えられない。

召喚されたのが魔物であればそのまま討伐。

私の部隊は精鋭だ。竜にカテゴライズされるもの、魔術なり魔法なりを使う高等な存在以外であれば、確実に対処できる。

もしそれが、万が一『悪魔・天使』の類であれば、即刻帰還し報告。まあそれはありえないだろうが……。

『悪魔・天使』が召喚されれば、確実にうちの魔術庁に強大な思念波が観測されて然るはず。

それに、この森林付近の町、村、皆に視認されたはずだ。

天を貫く一柱の光の奔流を。

召喚魔術の魔力らしき波をうちの魔術庁が確認したのが15日前の正午。

即座に王宮に報告、事態を確認・処理する為の決議が下されたのが14日前の朝。

調査の現場指揮として、私に白羽の矢が立ったのもその日だ。
部隊を百人隊に編成するのに1日弱かかり、王都を出立したのが1
3日前。

ここまで来るのに5日かかった。さすがに辺境だけあり、道中何度
か魔物と遭遇した。

7日間、何度か森に入り、平原をくまなく搜索し、細部に渡って指
揮してきたが、召喚された場所も、残留魔力ももうほとんど無い。
本当に、召喚魔術が行われたのかすら怪しい。

調査に不備がないか、念入りに1日かけて確認したが、やはり何も
見つからない。

「…うちの魔術庁も、弱体化したか…。」

そう嘆いてみれば、何やら森林南方のエレス川で不審人物が発見さ
れるときた。

人型の魔物——高等な存在かと注意して接近したが、当の相手
は一心不乱に弓を作成していた。

さーて、本格的にいかがせん。

見つからなかったとはいえ、相応の報告は必要だ。

私の報告如何で、もしかすれば軍部と魔術庁が対立する可能性もあ
る。

陰險な魔術庁のトップ・リヴァルス爺さんが、どんな報復行為をし
てくるかわからない。

短く刈り込んだ頭をガシガシしていれば、ふけが落ちてきた。

いい加減、風呂にも入りたいところだ。

まあ、報告内容は道すがら考えるとしよう。

「全員、注目！」

そう叫ぶと、10人の兵士がこちらを注視、佇まいを直す。

「調査は終了。何もめばしい発見がなかったが仕方あるまい。身元不明者セーヤは、オルスに任せる。そいつは本国へ移送後、判断を仰ぐぞ。次いで、イリガンとアックス。二人は他の仲間を率いて、未だ付近を捜索中の隊員90名を呼び戻しに行け。集合場所はここ、エレス川。俺はここで皆を待つ。100人全員の確認が取れ次第、本国へ帰還する。」

各々が敬礼し、行動に移る。

馬の嘶きが響き、オルス以外の9名が風のような速さで二手に散っていった。

「やれやれ…。」

川べりの石に腰を下ろし、一服する。

目をオルスに向ければ、オルスが男に自分の名前を伝えているよう

だ。

少し、笑いが漏れる。

あの堅物で、融通の利かぬ鉄面皮。

そんなオルスが、自分を指さし名を教えているのだ。
なにやら微笑ましくて仕方ない。

と、急にオルスの動きが止まる。

わなわなと、身体が震えているようにも見えた。

震えている？

あの、冷静沈着なオルスが？

怪訝に思っていると、脱兎の体でオルスがこちらへ駆けてくる。

……異常だ。

オルスに限って、そのようなことがあるわけがない。

「たい、ちょう……！」

声は、いつものように静かで事務的。

なのに、その震えた声は、戦慄を孕むからに違いあるまい。

「なんだ？」

努めて冷静に聞く。

「私の思い違いならば、幸いです。しかし、そうとは思えません。」

「どういふことだ。」

「隊長……。私、オルス＝セラルト。古代帝国研究者オレウス＝セラルトの孫としてお伝えします。彼の男セーヤは、おそらく古代帝国期の言語を習得していると思われます。」

1話 異文化ファースト・コンタクト”裏”

今、僕は縛られた状態で10人の兵士に囲まれている。

中世ヨーロッパの兵士のように全身を鎧で固め、手には槍、腰には剣をさしたステレオタイプの兵士達。

僕が彼らを視認した時にはもう遅く、いつの間にか背後をとっていた別の兵士達に押し倒された。

完成したての弓をもぎ取られ、荒縄で縛りあげられる。

困惑する意識の中、思う。

彼等は本気だ。

これは、映画とかドラマとか、そんなちやちなものではない。

僕の行動——一挙手一投足で、首を取られる。

「Wait! Please Wait!!」

敵意の無いことを伝えようと、拙い英語で叫ぶ。

だが全く通じていない。

通じていながら聞いていないだけかもしれないが、少くらしい反応してくれてもいいものなのに。

「kousa47utg」

「rstdbnkj.zwjouujm1」

全く聞き取れない言葉で、彼等は叫んでいた。

これは断言できる。英語じゃない。

フランス語でもドイツ語でもない。さすがにロシア語は知らないが、この顔立ちはどうみてもゲルマン系だと思うから、ロシア語ではないだろう。

僕は洋画好きであり、吹き替えを嫌って字幕でしか見たことがない。なので英語ならば中学生レベルで会話できる。

フランス語は、リュック・ベッソンとジャン・レノ好きがこうじて聞き取りくらいは自信がある。

ドイツ語は単に、大学で講義を受けているから数単語知っているだけだが、ニュアンスや雰囲気くらい感じ取れる。

なのに、彼等の言葉は全くわからない。

なんというか、単純に早過ぎて聞き取れないのだ。

母音だとか子音だとか、そんなもの存在していないんじゃないかってくらいに早い。

北京語や広東語は、日常会話が喧嘩しているみたいに早口だと聞いたことがあるが、彼等のような感じかもしれない。

僕を縛った後、兵士の一人がもう一人に何事か言って離れていく。隊長でも呼びに行ったのだろうか。

と、僕の横の長身の兵士が何か話しかけてくる。

「kayendy?」

「なんですか?」

「g w s o , 4 7 f h r ? ? 」

「…さっぱりわかりません。」

長身の兵士は、それっきり何も言わなくなった。

あれよあれよという間に、僕は隊長とおぼしき人物の前に突き出された。

他の兵士より一回り大きな身体に、太い首。

そんな身体つきにくせに、顔はびっくりするほど男前だった。

ジェラルド・バトラーみたいな、男らしいイケメンだ。

横の長身の兵士が、隊長に一言。

多分「こちらへ」とかそんなだろう。

うなずくようにして、隊長はこっちへ向かってくる。

金髪のジェラルド・バトラーは、間近で見ればもってイケメンだった。

別に僕はゲイではないが、日本のマスコミがイケメンともてはやす俳優、アイドルをイケメンと思ったことがない。

男らしさをなくした男など、中性的以外のなんだと言うのか。

だからこそ、外人のスターに魅力を感じてしまう。

身長が低く、筋肉の付き辛い自分をコンプレックスとする僕は、ゆえに、反対のこうした男性的な人に憧れを持つのもかもしれない。だからつい声を漏らしてしまった。

「どうしたら、そんな筋肉つくんですか…?」

やっぱり人種の差ですかね?

そんな不謹慎なことを考えていたからだろうか、長身な兵士が槍の柄で突いてきた。

地面とキスしそうになり、あわてて膝を付いてバランスを保つ。

「h u s t h j k」

多分、勝手にしゃべるなと言われたのだろう。

もったもなので、口を閉じた。

生殺与奪。彼等はそれを握っている。

縛られたことすら、幸運でしかない。

もしかしたら、有無を言わず僕は殺されていたかもしれないのだから。

と、隊長は僕を突いた長身の兵士に、叱るように何か話しかけている。

咎められたらしく、長身の兵士も黙った。

さて、どうやら今度は隊長との会話らしい。

「k s r y f?」

やっぱり、さっぱりわからない。

多分何かを聞いているのだろうが、意図する所が不明だ。
名前か？

どこから来たのか、か？

「名前ですか？」

まあ、伝わらないだろうな…。

案の定、隊長は口をつむり、思案するように眉を曲げる。

そして、二度三度、今までの言葉とは微妙に違う発音で何かを聞いてくる。

余計にわからなくなった。

同じことを別の言語で言っているのか、それとも一緒にの言語で次々別のことを聞いてきているのか。

頭が痛くなってきた。

相手も頭が痛いらしく、眉がどんどん曲がっていく。

非常に怖い。

視線で人を殺せるような、見方によっては殺人者のような顔つきに、肝が冷える。

すると、隊長は思いもよらない行動に出た。

自分の方を指さし、「ザウルツ（ザルツ？）、ザウルツ」と言い始めたのだ。

やっぱり名前か！

予想が当たり、僕も声を上げる。

「晴哉！晴哉！」

「セーヤ？」

どうやら伝わったようだが、やっぱり言語が違ったためか言い方が違う。

でも、それでいい。

名前だけでも伝えられれば、相手も僕を人間らしく扱ってくれるだろう。

しばらくして、隊長が皆を集めて何かを命令している。

僕の身柄は長身の兵士に任せられたようだった。

長身の兵士は、無言で僕の横に立ったまま。

ここまでの状況を整理してみた。

恐らく、といっても確定だろうが、ここは日本ではない。

そして何より、地球ではない。

いや、地球という言い方は変だ。

かつての世界…前時代…現代…そう！現代だ！

現代ではない。

予想では過去。

中世ヨーロッパの何処か、だと思う。

兵士が様になり過ぎているし、何より現代文明の匂いを感じない。自分は、多分タイムスリップしたのだ。

理由はわからないが、そうだとしか思えない。
これが実は映画の撮影でしたとかは到底思えない。
撮影陣も見当たらないし。

彼等の話す言語も、中世の古英語やその類だろう。

日本でさえ1000年の内にあれほど自国語が変化したのだ。

そう納得していた矢先、自分の予想を大きく揺るがすものに気がついた。

自分を見張る、長身の兵士。その、剣を納める鞘。
そこに、漢字の『強』一文字が彫り刻まれている。

……漢字だと？

馬鹿な！自分の予想では、ここは中世ヨーロッパ。

いくらシルクロードが存在しているとはいえ、騎士がお遊びで漢字を彫るか？

しかも、自分の鞘に。

だから、呟いてしまったのだ。

「キョウ……？」

瞬間、長身の兵士が、信じられないものでも見たかのように、こちらを向く。

冷静沈着そうな顔を崩し、限界まで見開かれた目は、僕を見て、次いで自信の鞘へ。

「キヨウkjirts?!」

キヨウと言った!

漢字の音読みが、通じる...?!

長身の兵士が、あたふたしながら自信を指さし、必死に「オルス!
オルス!」と言っている。
オルス、と言う名前なのか…。

「オルス。」

そうだ、と言わんばかりにうなずき、懷から黄ばんだ紙——羊
皮紙か?を出してきた。

その羊皮紙には、鞘に彫られた『強』の一字のように、いくつもの
漢字が縦に列挙して書かれている。
そして注釈のように、漢字の横には見慣れぬ文字群。

予想が崩れた。

アルファベットの筆記体ではない。

全く未知の言語だ。

ヨーロッパではない...?

衝撃もそのままに、異質な存在感を放つのは漢字だ。
なんでここに漢字が存在する?

オルスが、羊皮紙に書かれた漢字の一つ、『兵』を指さす。

「j i d s e s u m ?」

これは何だ？

そう、聞こえた。

だから……

「ヘイ」

そう答える。

オルスが、目に見えて狼狽する。

指を、下に動かす。

『戦』の文字。

「セン」

次々指を動かされた。

『剣』『鎧』『軍』『槍』『斧』といった武器防具の名詞。

『強』『弱』『泣』『痛』『倒』といった感情状態の文字。

『火』『水』『風』『土』『光』といった、古代ギリシャの四元素
といった字。

その全てを音読みしたところ、ついにオルスが隊長の元に走り出した。

嫌な予感がする。

異質、その一言に尽きる。

自分にとって、未知なるこの世界。

そこに、漢字だけは既知のままに存在している事実。

久しぶりに目にした馴染みの文字に、これほどまで震えるのは何故だ？

そして、何故こんなに、嬉しいんだ？

2話 『古代帝国』（前書き）

書き方が1人称だったり3人称だったりですみません。
読み辛いかと思いますが、御容赦のほどお願いいたします。

初日にして、お氣に入りが3件ありました。
ありがとうございます。

とても嬉しく、氣が引き締まります。
必ず、この作品を完結させます。

2話 『古代帝国』

ザルツは驚きを隠せないまま、オルスの報告を聞いた。

古代帝国期——古代帝国だと？！

「馬鹿なっ…。」

「事実です、隊長。」

反論を拒むように、オルスがザルツの言を封じる。

セラルト家…いかに武人とはいえ、さすがに彼の家の出自の者よ。
オルスの眼には、否定を拒絶する光が灯っている。

『古代帝国』

滅んでから5000年とも6000年とも言われる、かつての人類
の栄華の象徴。

眉唾物とさえ思いたくなる、その文明・発展の凄まじさ。

歴史書と、吟遊詩人の詩。

各地に存在する異様な遺跡。

そして失われたと言われるかつての大魔術を魔術書に残す。

現世の人間に夢を与え続ける存在であり、秘匿される存在。

鉄以上の硬さを誇る剣。

音の速度で走る槍。

斧にもメイスにもなる、羽毛の軽さの二重武器。

鉛玉を噴射する、火の筒。

全ての魔術を相殺する盾。

竜にも勝る全身鎧。

神に匹敵する魔法。

悪魔王を屈服させる魔術。

だが滅んだ。

栄華を極めながら、それでも滅んだ。

驕る文明の末路を、今生きる我々に教え諭すようにして。

ただ、尚も残され、今も扱われし遺物が存在する。

一つは『遺産』。

古代帝国期に作られた物達。

古代帝国の栄華を偲ばせる、高い文明水準が生み出した秘宝達。

そしてもう一つは『古代帝国言語』。

文字でありながら文字にあらず。

人の生み出せし魔法魔術の最高峰。

古代帝国が栄えた真の理由にして、現在秘匿される最大の理由である。

彼の予想は、おそらく正しいだろう。

形骸化した他国の『古代言語研究機関』と違い、エス・レス・カーンの名門貴族・セラルート家は、現在世界で最も古代言語を理解する学者の家だ。

その理由として、初代当主であり古代帝国研究家のオリオンから脈々と連なる歴代当主の研究成果、「古代言語の為なら竜の巢にも潜る」と揶揄されるほど古代言語にのめり込む前頭首・オレウス侯が挙げられる。

オルスは、祖父のオレウスに懐き、幼少時から古代言語——秘匿されし文字群——に触れてきた。

我々が知りもせず理解もできぬ古代の英知に、この部隊……いや、エス・レス・カーン国内で人一倍触れてきた男が、目の前のオルスだ。彼が言うなら、間違いなかるう。

「……これは、面倒なことが増えたな、オルス。」

神妙に、オルスはうなづく。

本国への報告内容に困らなくなったが、これは国家レベルの措置を取らざるをえない状態だ。

今、現在現時刻を持つて、この部隊は「召喚魔術使用の有無及び使われたと予想される地域の調査」から、「古代帝国言語習得者の隠匿護送及び他国への秘匿作業」へと命令が移されたに等しい。

戦場経験が国内随一のザルツは知っている。
骨の髄まで、知っている。

魔術——人を、対象者・対象物を、傷つけ破壊する魔法——

―は、戦場でまさしく暴威を振るう。

一振りの剣も、一本の槍もいらぬ。

極論すれば、身を守る盾も鎧も、相手に接近する必要もない。

ただ、他人より精密に魔力を操ればいい。

ただ、他人より多くのスペルを暗唱できればいい。

魔力を研鑽し自己を研鑽すれば、一瞬で百も千もの命を屠ることができる。

故に、魔術。

人の理を超越せしもの。

当代の魔術の極みが『その程度』なのだ。

鑑みるにすぐ理解できるはず。

今より5000年とも6000年とも言われる昔に存在した、人類の栄華の極致。

『古代帝国期の魔術』。

そんなもの、この大陸全てを滅ぼせて『しかるべき威力』のはず。

未だその時代の魔術の全貌は明らかになっていないが、確実に判明していることがある。

『古代帝国期の魔術』を使用するには、『古代帝国語』――つまり古代帝国言語――を理解していなければならない。

当然だ。

魔術は呪文詠唱行為で顕現する、超常現象である。

言語を知らぬものが、同じ魔術を行使できる道理はない。

古代帝国の魔術とは、古代帝国時代の人間が行っていた魔術。そのスペルは古代言語。

つまりそういうことだ。

（この男…セーヤの存在、他国へ漏れれば、10年前の大戦以上の世界大戦が勃発するな…。）

ザルツの眉が歪む。

血と、肉と、骨と、狂気。

その地獄を開く鍵が、今ここにいる。

この世界を知らぬセーヤが、己の知識の重要性を知る由もない。
この世界において、古代言語がただひたすらに一般庶民に秘匿される理由を。

古代言語は、いっふなれば魔術世界の核兵器であるのだから。

2話 『古代帝国』（後書き）

この世界では、

- ・ 白魔術、聖霊魔術… 『魔法』
- ・ 黒魔術、精霊魔術… 『魔術』

とさせていただきます。

3話 エレス平原にて（前書き）

異世界に召喚されたということ。

それは、かつての世界での常識・観念・価値観の崩壊を意味すると思っ
ています。

予想不能の事態、理不尽なまでに続く苦難苦境。

それなくして、異世界は語れないのではないかと…。

この作品を書こうと思った理由の一つです。

3話 エレス平原にて

あの森から、川から離れ、3日経つ。

僕はと言うと、何故か灰色のローブを着せられ、兜を被らされている。

重くて、気を抜けばすぐに首が左右に傾いてしまう。

傍から見れば、背の低い騎士が、立派な体躯の1000人の兵士にまぎれているだけだが。

現在、金髪ジェラルド・バトラー改めザルツ（ザウルツ？）隊長率いる1000人の部隊と僕は、見事なまでにのどかな平原地帯を馬で疾走中である。

どこに向かっているのか、僕にはどのような処遇が待ち受けているのかは不明だが、人道的な扱いを祈るしかない。

今も護送のような待遇であるし、この部隊が目指す場所でも、もしかしたらザルツ隊長が何かしら取り計らってくれる気がする。ひとまずは安心していいかも。

縛っていた荒縄も、結局すぐに解いてくれたことだし。

馬に乗って3日目の現在、人生で初めての経験ばかりだった。

まず、今乗っている馬だ。

乗馬なんてしたことのある人間が、1億数千万の日本人全体で、何割ほどになるのか。

大多数が乗ったことなどないだろう。

僕も、その例に漏れず大多数側。乗ったことなんてない。

だから馬には舐められた。身長も低く、初めて間近で見る馬の巨大

さにびびっていたら、鎧に足をかけた瞬間、旋回されたのだ。
無様に地面に転げ落ち、恨みがましい目で馬を見たらオルスが馬を
あやしていた。

「n i h d e k k h : : d u f w e . . .」

何事かを僕に言うが、表情と口調の柔らかさから推測するに、「心配するな」とか「怖がるな」とかだろうか？とりあえず僕を励ましてくれているのだと思う。

てか、もしあれで「馬にも乗れないのか？無様だね。」なんて言われてたら、人間不信に陥る。

馬は非常に賢い動物だと聞いたことはあった。

そして、非常に臆病な一面も持っているとも。

初対面の人間を怖がっただけかもしれない。

そう思っ、今度はいきなり乗ろうとせず、まず馬の前面に向かう。

（よく戦国武将が、自分の馬に語りかけていたとか…）

なにもしないよりマシ。これで乗馬しやすくなれば僥倖と、面長の顔面に手を当て、優しく撫でる。

鼻息の荒かった馬が、少しずつ少しずつ、穏やかな呼吸になる。

…いけるかもしれない。

馬の、黒いつぶらな瞳を見据え、伝わるはずのない人語で語りかける。

「さっきは、いきなり乗ろうとしてゴメン。どうか、背中に乗らせ

て下さい。」

しばしの見つめあい。

と、馬がわずかに首を振って、傾けた。

……今度は、ゆっくり。

鐙にしっかり足を乗せ、思いっきり身体を持ち上げて跨る。

（乗れた！！）

人も動物も、礼儀無い者は信頼されないものなのかもね。

後ろで、オルスが笑っていた。といっても、微笑み程度の小さな笑みだが。

この人には槍で突かれたが、『漢字』の一件以降は打って変わって僕に優しくしてくれる。

漢字を知っている僕を、同好の志と思っているからか？

……そんなわけないよな、多分。

隊長の前ではないし、公私をわきまえる事務的人間だからって可能性の方が高そうだ。

あんまり深く考えるのも詮無いけど…。

馬に乗った後は、オルスが自分の灰色のローブを僕に渡してきた。

どうやら着ろってことらしい。

次いで、少し痛んだ兜。武骨な鉄の兜は、フルフェイス型で視界も狭く、息苦しく、何より重かった。

サイズも少々大きいのでぶかぶかしている。

自分達の装備を貸す意味を完全には理解できないが、川原で見つけた小汚い少年を、馬に乗せて着飾らせてくれるのだ。

改めて考えてみれば、寛大な処置じゃないだろうか。
今になって、有り難く感じる。

彼等がどのような目的でこの場所に来ているのかは知らないが、軍事行動なのは間違いない。

そんな命を懸けた任務の最中、お荷物にしかない僕をこうして扱ってくれている（見方によれば保護してくれている）彼等に、感謝の念がふつつと湧いてきた。

「オルス。」

オルスが、こちらに顔を向ける。

呼び捨てなのは申し訳ないが、こちらの言語で「Mr」がわからないから仕方ない。

「ありがとう。サンキュー。メルシー。謝謝。」

感謝の言葉をいっぱいあげる。笑顔で、友好的なことを言っているアピールも忘れずに。

オルスも、何とはなしに僕が感謝の句をのべているとわかったみたいだ。

「utnds」

どういたしまして、か？

あいにく、やっぱりまだ発音を聞き取れないけど。

そうこうして出発して、冒頭の3日目である。

初めての経験はまだある。

乗馬は、痛い。すごく痛い。

鞍は硬く、舗装されていない道を疾走するのだから、振動が股間にモロにくる。

あと、鞍と内股の皮がずれるのだ。

昨日の夜に確認してみたら、皮がめくれて血が滲む箇所がいくつかあった。

このまま順調にいけば、内股の皮全てはがれるんじゃないか？

乗馬の大変さを身をもって知る。

同じ服、風呂に入っていないという不衛生な今、細菌やウイルスに侵されないか非常に心配だ。

川にいたころの水浴びが懐かしい…。

今日もまた、乗馬の痛みに耐えながら疾走中。

街道とおぼしき道が、だんだん広くなってきた。

町か、村。とにかく人の住む圏内に踏み入れたのかもしれない。

まだ平原と丘陵のみの視界だが、平原の雑草が牧草のようなものに変わってきている。

家畜の放牧用のものか。

やっぱり、そこかしこに人の手が入り込んだ気配がする。

思えば、本当に長かった。

体感しただけで18日間。

一人である森と川で過ごしてきた日々。

そして、馬に揺られながら、言葉も人種も違う人達にまぎれ、疾走する日々。

この3日間で、オルスとはジェスチャー込みで何度か会話した。

時折『漢字』の音読みを聞いてくるので、答えてあげれば、懐の羊皮紙の余白に新たに書き足している。オルスは兵士だけど、勉強が好きなタイプかもしれない。

他の兵士よりも事務的な雰囲気は、彼が文系だからか？

それなりに、友好関係は築けていると思う。

ザルツ隊長には、他の隊員の名前を教えてもらった。

発音しづらい名前も多々あったが、概ね名前は覚えられた。

ただし。イマイチ名前と顔が一致しない。同じ名前の兵士も複数いるし。

白人なので、顔が一緒に見えるのは仕方ないだろう。僕はモンゴロイドだ。

ふと思い起こせば、この世界に順応している自分に、心底驚く。

気が狂いそうになる夜は何度か越えたが、それよりも好奇心に震えていた。

自分が、まるで、誰かの描いた物語の主人公であるかの様な錯覚。

その、高揚感。

現実小説より奇なり。

浮かれていた。

そう、僕は浮かれていたのだ。

ランナーズ・ハイの気持ち。

ただ、『幸運にも何も起らなかっただけ』なのに、自力で生き残ったのだと信じて疑わない、傲慢な自負。

ここはどこだ？

過去の中世ヨーロッパか？

未だに、その可能性を捨てきれないでいた僕は、本当に甘かった。

思い返せ。

アルファベットを使用しない白人がいるものか。

思い返せ。

あの森の、現実離れた雰囲気。

思い返せ。

この3日間、何故ザルツ隊長たちは、この平原地帯を過度に警戒して疾走している。

馬の嘶きが、合図だった。

平原の彼方——右方から、何かがやって来る。

黒い、無数の塊達。

遠吠え。

雄叫び。

そして、けたたましく打ち鳴らされる、鉄の音。

「nilufzug7!!!!」

兵士の一人が叫ぶ。

全員が右へ倣う。

槍が整列し、人馬が陣を形作る。

ザルツ隊長が兜を被る。

オルスが、僕を守るように前へと進み出た。

思い返せ。

自分の今、いる場所を。

奇なる場所を。

現実、小説より、奇なり。

「隊長！バレル共です！」

イリガンが叫ぶ。

ようやくおでましか、祖国の地を汚す魔物共め。

セーヤを移送する手前、交戦したくはないが、殲滅せねば付近の町

村に被害が出る。

叩ける時に叩かねば、延々と蔓延るだけだ。

「右方注目！」

私の号令に、右辺の部隊30騎が馬首を、バレル共へ向ける。
指揮はイリガンだ。

2クリーク先も見通せる私の目には、約50匹程の奴等の群れ。

「アックス！左方を警戒しておけ。オルスは後方を警戒しつつ、セーヤを護衛して待機。」

「は！」

イリガン指揮下の30騎が、馬に備え付けた軽弓に矢をかけて待機。
イリガンの合図待ちに入る。

バレル50匹程度、それで半数以上は消えるだろう。

相手との交戦まで残り1クリークを切った。

「放てえっ！！！」

イリガンの号令が飛ぶ。

熟練された兵士による、間髪入れない連投に、次々と奴等が沈む。的にならぬよう、群れが散らばり始めるが、もう遅い。

『魔物』などと大層な名称を与えられてはいるが、所詮狼犬にも劣る知能の持ち主。

地力が人間より多少優れているだけの、本能で動く生物。

我等は、我等の様な人間は、一糸乱れぬ統率と戦略立った動きの兵隊だ。

到底敵うものかよ。

大人しく地に還れ。

「槍兵前へ！」

私も兜を被る。イリガン達が撃ち漏らしたバレル共の殲滅を開始する。

イリガン達が退いた前面に、私に率いられた30騎が新たに躍り出た。

奴等の数は最早20にも満たない。

野盗の方が、まだ持ちこたえられただろう。

「突撃！」

静かに、しかし猛々しく、バレルに向かって突撃する。

槍の穂先を醜悪な的へ向かって放つ。

私の投槍の強大な威力に、巻き込まれるように2匹3匹と、一辺に

刺し貫かれた。

即座に抜刀し体勢を整えてみれば、最早バレルの群れは全て、地に伏していた。

まだ息があるものも、部下が次々と槍で処理している。

「…やれやれ。」

あっけないほどに、一息の戦闘で全てが終わった。

アックスの方を振り返ると、横に首を振っている。
左方からの襲撃はなし。

オルスも同じくだ。

どうやら、本当に闇雲に向かってきただけの一団らしい。

自分が先ほど投げた槍に近づき、一気に引き抜く。

3匹の肉の塊が、重々しく地面に落ちた。

…腕が鈍ったか。5匹を狙ったんだが…。

まあ、この腕が振るわれない程度には、平和になったってことで納得するかね。

「矢を回収したら、こいつらを集めて焼却するぞ。」

槍を担ぎ、そう命令する。

この程度の働きなら、何の問題もないのだ。

セーヤの方を見る。

兜を被らせたから、表情まではわからぬが、震えているのは間違いない。

…つくづく、あいつはおかしい。

この低級バレル共など、この大陸で生きる者皆が周知の生物。童に童女ならいざ知らず、あいつは少なくとも20代に届くか届かないかのはずだ。

この程度で、今さら何を恐れる？

お前は、あの『ラフェルドナス森林地帯』にいたではないか。

4話 野営

見張りを立てながら、交代で休息する。

バレル共の回収・焼却に思った以上の時間がかかり、止む無く野宿を強いられた。

ここから最も近いリューヒンの砦まで向かってもよかったが、少しばかり眠った方がいい。

ただでさえ走り通しの3日間だ。

柔らかな草原に身を預ける方が、石造りの砦の窮屈で肌寒い休憩スペースより、夢見がいいに違いない。

僅かな仮眠を取った後、私は水筒と携帯食料を手に、焚火を囲む一団の元へと足を運ぶ。

「眠れましたか、隊長。」

「ああ、ミリアム。久しぶりに、いい夢を見れた。寝る前に酒を飲んでいたら、もっといい夢を見れただろうな。」

「まったく、王都のエールが恋しいですね。」

共に火を囲む兵士の一人・ミリアムが、固いパンを粗食しながらそう呟く。

「女じゃなくてか？」と言うと、他の兵士達が大声で笑いだした。ミリアムも調子に乗って、「隊長も、さぞ奥さんが恋しいでしょうね？」と返答してきたので、軽くこづいてやった。

全く、当り前だろう。生まれたばかりの娘も見たい。

「エールもだが、ビリガー鳥の肉もだな、オルス。」

「全くです。」

オルスに話を振れば、水筒から水を一口、そう答えた。

いい加減、味覚を刺激する食物にありつきたいところだ。

明日はリユーヒンに寄って、マシな食料にありつくでしょう。

腰に付けた革袋から、葉巻を一本取り出す。

最後の一本だ。

これを吸いきつてしまえば、あとは王都に帰還しなければ手に入らない。

内海を隔てた向こう側、大国エヴァルドのみが製造・販売している嗜好品・葉巻。

特別な種類の植物の葉を乾燥させ、香草でくるんで一本の棒状にしたもので、火を点け煙を吸い込んで楽しむ。

初めて吸ったのは、10年前の大戦の最中。

始めは喉が焼けるような感じと、むせて咳き込む苦しさしかなかったが、今ではこれがないとやっていけぬ。

ただし、高い。

私の安い給料では、せいぜい月に30本、1日1本ずつ吸えれば御の字か。

それ以上買いこめば、生活できなくなる。

妻にも怒られるしな。

紫煙をくゆらせ、一口一口を味わいながら、煙を嚥下する。

身体中に、甘い痺れが走る。

現場を任される指揮官として、痺れを誘発させる代物を嗜好品にするのとはどうかと自覚はしているが、心労の溜まる仕事に、一息の清涼剤として許されてもいいだろう。

「しかし、セーヤは一体、何者なんでしょうね。」

葉巻を楽しんでいると、オルスがぽつりと呟いた。

他の兵士達も、思案顔になる。

もちろん、この私も。

「何者も何も、あいつとは言葉が通じねえしな。」

兵士の一人が言う。

そうだ。

この3日間、意思疎通は身振り手振りでなんとか取れるようになったが、それ以上の進展は望めなかった。

言葉も、文字も通じぬ。

「だいたいあの『ラフェルドナス』に一人で、武器も持たずにいたことが不可思議だ。」

「俺達騎士だって、一人で向かうのは肝が冷える森だ。」

ミリアムが首を掻きながら言う。

そう。

そうなのだ。

『ラフェルドナス森林地帯』——別名『上古の森』。

古代帝国期か、それ以上前から存在していると考えられし、深き森。『何故か』動物はおろか、魔物の類でさえ『近寄らぬ』謎の森。

その、得体の知れぬ森でずっと生活していたのかとも考えたが、それもなさそうだ。

信じられないことだが、『つい最近あの森で生活し始めた』ように感じるのは、気のせいではあるまい。

昼の様子からも、バレルと初めて接触した風に見えた。

セーヤに関して、不審な点は2つある。

一つめは、黒髪黒瞳。

30年の私の生涯で、あのような身体的特徴の人間と出会ったことは一度もない。

人型の魔物——には、どう疑っても見えん。

あれは、間違いなく、人間だ。

付近の村から出た、遺伝的な変異者——アルビノのような——

——かとも思ったが、その考えを改めざるをえない事実が生まれた。

それが、不審な点の2つめ。古代言語を習得している点だ。

存在を噂される未知なる大陸。その出身者の可能性が高い。

兵士養成学校時代に習った、簡単な古代帝国期の歴史科目に曰く。

古代帝国を築き上げた重鎮たちの祖先は、外なる大陸から大海を越

えてこの地にやってきた。

ただ、5000年とも6000年ともいわれる神話の如き過去の言い伝え、私はあまり鵜呑みにはしていないが……。

「セーヤは、異人かもしれぬ……。」

私の言に、皆が動きを止める。

「異人……？　どういうことです？」

「オルス、他の奴等より賢いお前なら気づくだろう？」

そう言ったらミリアムが「俺らだってエス・レス・カーン人ですよ。」と反論してきたので、笑って流しておいた。

私がオルスにだけ、本当に伝えたかったもの……。

むろん、『古代帝国言語』のことだ——そう、言外に含ませた。

セーヤが『古代帝国言語』を習得している可能性を、私とオルス以外には教えていない。

秘匿されし文字を、そう易々と話す訳にはいかないのだ。

皆には、「召喚魔法に関係する物かもしれん」とは伝えたが。

しかし、その理由では納得しない者が始める可能性も、ある。

命令厳守の兵士とて、人間。

話す口が、思考する頭脳がある限り、憶測と噂は必ず漏れ広がる。

懸念事項は、ここで断ち切らねばならん。

「異人…というより、異なる国、いや大陸か？その、我々の知る世界地図以外からやってきた、人間かもしれん。」

「まさか、噂される未知の…？」

兵士の一人が聞いてくる。

「うむ。お前たちも、大海の広さは知つていよう？内海でさえあれほど広いのだ。大海の先に、我々の大陸のように、群雄割拠し、様々な文化と言語を持った人間がいてもおかしくない仮説だとは思わんか？」

一様に押し黙る兵士達。

エス・レス・カーンは賢者の国。

他国より、教育水準は高い。大陸一の大図書館を構えるのは伊達ではない。

大海の彼方の未知なる大陸など、我が祖国の他はエヴァルド以外で、与太話・御伽話として一笑に付されてもおかしくない予想だ。

オルスも押し黙っているが、他の兵士と違い、私の『異人』という表現の意図に気付いているようだ…。

流石、セラルト家の次期当主。

上級士官を約束された家柄の者が、何故現場で命を張る、私の部隊への配属を希望したのやら…。

……ん？もうそろそろ、見張り交代の時間だな。

考えるのはこれくらいにして、さっさと見張りの奴等を眠らせてやらねばな。

「さ、似合わない考え事なんかはやめて、楽しい楽しい見張りに向かうぞ。ほら、皆立て。ミリガンは、上官への不敬発言で次の交代も無しだ。」

「え？！勘弁して下さいよ！」

さっきまでの沈んだ空気から、皆一様に破顔して笑いの渦が起こる。セーヤについては、王都で詳しい取り調べが行われるだろう。私の立ち入る場面は、これ以上なさそうだ。移送という職務に尽くすでしょう。

ただ、オルスだけは、見張りに向かう準備をしながらも、思案顔のままだったのが気にかかったが。

彼等は気付かない。

仲間が一人ずつ、消えていつていることに。

彼等は思いもよらない。

今日、この場が人生の幕を下ろす場になることを。

彼等は気付かない。

突然命を絶たれた時、口から声など出ないことを。

彼等は思いもよらない。

朝日を、もう二度と拝めぬことを。

4話 野営（後書き）

展開が遅くてすみません。

5話 襲撃者（前編）（前書き）

お気に入り登録が21件もありました。

感激です。

この小説を登録していただき、本当にありがとうございます。
なにぶん進行速度も遅く、ヒロインもおらず、ファンタジー小説としては本当に地味な展開で申し訳ありませんが、どうかもうしばらくお付き合いくださいますようお願いいたします。

今回は、この小説の舞台についての補足を。

小説本文で説明するのが難しいので、苦肉の策です。

5話 襲撃者（前編）

謎の生物達との戦闘の後。

ザルツ隊長は、平原の街道から少し離れた場所の、小さな雑木林を野営場所を選んだ。

あの生物の焼却作業が手間取ったからかな…。

今日中には町か村に着くかもしれない、というようなニュアンスで、オルスが話しかけてきていたけど、まあ僕の予想だけで、実際は全然違うこと話しかけていたのかもしれない。戦闘自体は一瞬だったけど、回収作業は倍以上の時間がかかってい
たし、日が落ちたのも程なくしてからだった。

いやあ、しかし、気分の悪い出来事だった……。

なんといってもあの臭い……。

今も、胸がムカムカする。

ゴムを燃やした後の様な、不快な臭いがまだ鼻で燻ぶっている。

ただ、その臭いに皆はそれほど不快感を示していなかった。

彼等にとっては、よく嗅ぎ慣れた臭いなのかもしれない。

現代人が、排気ガスに慣れている感覚に近いのだろうか。

僕は、皆の焚火から離れ、大きな木に背をあずけて夜空を見上げていた。

なんとなく一人になりたかった。自分の考えに集中したかったものがある。

どうやら世界が変わっても、星の輝きは変わらないらしい。
あと、月も一つだった。

二つ三つあったらどうしようかと思って心配した。

昼間の、ザルツ隊長達の戦いを思い返すと、いまだに身体の震えが湧き起こって来る。

僕は確信した。

ここは、「地球」じゃない。「過去の世界」でもない。

「異世界」だ。

昼の光景を思い返す。

見たことのない異形の生物達。

始めは、狼か野犬の群れかと思った。

黒い体毛に覆われた、1mあまりの小柄な体躯。

でもそれらは、近付いてくるにつれ、四足歩行ではなく二足歩行で疾走してきているのに気が付いた。

あの顔面——人間のようで微妙に違う造形。

人と、猿と、その中間の顔立ち。

なのにそれを「類人猿」だと感じられなかったのは、口からはみ出た牙のせいだろうか。

白内障のように、白く濁り切った巨大な眼球のせいか。

なんの理性も感じられない、獣の叫び声のおぞましさだったろうか。それとも、手に持つ、（多分血で）黒ずんでいた、粗末な鉄製の剣・斧のせいだったか。…絶対、盗んだりしたものだだろうなあ……。

予想外だったのは、どうやらそこまで強くはなさそうなところ。
いや、もちろん俺みたいに一般人だと、瞬殺されるだろうけどね。
少なくとも、ザルツ隊長達職業軍人の面々には、手強い相手…では
なさそうだったし。
事実、瞬殺されたのはあちらだったしね。
手際の良さにびっくりした。
田舎の爺ちゃんが、実家に作られたスズメバチの巣を楽々駆除して
いるのを、何故か思い出してしまった。

……しかし、振り返ってみると…。

現実離れた森林。

中世の騎士達。

正体不明の、モンスターのような生物。

そして、何故か『漢字』が存在するという、トンデモな事実。

『RPG』。または『ファンタジー』。

そんな言葉が、ふと脳裏をよぎる。

そういえば、昔やったRPGゲームに、異世界に飛ばされた主人公
がいたよな。

俺と違って、「異世界」とは言っても、時間軸が違っただけで同一世
界だったはずだけど…。

……もし、そのシナリオと僕の状況が同じだったら…。

いかん！いかん！考えるな！

多分違うと思いたい…。

旧文明が滅びた未来へタイムスリップしたなんて、マジ勘弁だ。

……、でも、違うと言いつれないところが怖い…。

「…とりあえず、今日はそのまま寝てしまおう」「ソレ無理デス」…
か？」

ミシッ。

痛っ！首？！骨？！

「っ…！かつ……？！」

「静カシナサイ、騒グダメデス、コノママ骨折リマス、イイデス？」

カタコトの…日本語？？

日本語？！何？！誰？！馬乗り？！痛！！

黒い服…男？女？

「アナタ、質問コタエル。正解、マバタキ1度。間違イ、マバタキ2度。イイデス？」

首を絞める力が弱まる。痛みが、少し引く。

ザルツ隊長達は…遠い。しかも焚火から離れていく…？

待って！こっちに気付いて！！

ゴスッ！

一発、頬を殴られた。

こっちを見る、ということか…？

心臓の鼓動が、高まる。

命を、握られている…。

「言葉、間違ッテマス？通ジルデス？」

意味は通じる…でも、違う。

外国人が、カタコトの日本語を話す様に、単語のみを組み合わせて話している。

ミシ…。

首の圧力が高まる。

「マバタキ、お願いデス。殺ス、イイデス？」

瞬きを、一回。言葉は通じていると、訴える。
相手の顔は…見えない。
全身黒づくめで、顔も黒い布を被っている？からか見えない。
この暗闇の中で、僕の顔が見えるのか？

「ワカリマシタ。」

首への圧力が下げられた。
でも、苦しいのに咳き込めない。
まだ、相手は僕の首を締めたままだ。

「アナタ、彼等二連レラレテ、ココマデ来マシタ？」

瞬きを一回。

「何故一人デス？ラフェルドナスデ、赤い髪ノ男ト、会イマセンデ
ス？」

赤い髪の、男…？
そんな奴、知るか。あの森では、15日間ずっと、一人だった。
瞬きを、二回。

「h...w...。mowdurs,wedmluals...sw
iddn。」

相手が、独り言を呟いた。
思案しているようだ。

言葉の抑揚は平淡だが、心なし焦っているように感じる…。

しかし、この声…。

男？にしては高い。女か？

でも、この握力の高さは何だ？

何にせよ、顔がわからない。

「ワカリマシタ。少々、面倒ナコト、ナツテルミタイデス。アナタ、コレカラ攫イマス。」

何？！

「ソノ時、騒グシタラ、骨折リマス。アト、アノ兵士達、何人カ殺ス、イイデス？」

…。
…。

瞬きを、一回…。

「デハ。」

そう言つて、相手は僕をローブごと肩にかつぐ。
この世界に来てからの食料事情で、僕の体重が軽くなっているとは
いえ、凄い膂力だ。
相手の身長は、思ったより高かった。
170cm以上。多分それくらいはある。

「口開イタラ、舌嚙ミマス。危ナイデス、イイデス？」

もう首は絞められていないので、頷いておいた。

抵抗すれば、多分殺されはしないにせよ、五体満足は望めない。
そして、ザルツ隊長達に危害が及ぶ。

正直。

たった一人の相手に、隊長達が遅れは取らないだろうけど、今は夜
間だ。

視界も悪く、集団で行動できない。

この謎の人物にかかれれば、兵士の一人や二人、すぐ殺されそうな気
がする…。

絶対、普通じゃない。

まるで、アサシンだ。

だから、従つた。

いきなりで驚いていたこともあるが、よく叫ばなかったな、自分。

…ああ、そうか。

本当に驚愕した時、人間は声を発せられないんだつたか…。

「行キマス。」

相手が告げる。

……え？まさか、僕をかついだまま、飛び上がるつもりか？

相手が膝を曲げ、木立に身を投げようとした刹那。

ガスン！！

相手の足もとに、槍が刺さった。

投げ槍。

こんな夜間に？！

僕が、かつがれたせいで相手の背中側にある頭を、無理やり正面に向ける。

そこには、長身の兵士——オルスが立っていた。

セラルード家に生まれ育った自分にとって、『古代帝国言語』……

「秘匿されし文字群は、特別な意味を持つ。

「セラルードの者は、古代帝国への憧憬に魅入られている。」

幼いころから、そしてそれは、多分自分の生まれる遥か以前から、ずっと他人に言われ続けてきた。

セラルード侯爵家。

エス・レス・カーンで最も名誉ある家の一つ。

にもかかわらず、宮廷内の権力闘争には露程も関心を示さない。ただ狂うように『古代言語』のみを追い続けるさまは、探究心の一言で片付けるには足らない妄執の体。

庶民が一生馬車馬の如く働いても手に入れない額の金貨を、ただかだか文字の為に一瞬で浪費する。

正気を疑われてもおかしくない。

金持ちの道楽と指差され非難されても、仕方ない。

でも、それでも自分は。

自分達セラルードの祖は、歴史という大河の浪漫に焦がれた探究者なのだと、そう思っている。

血に刻まれた宿命だろう。

そして自分は、例えばどんなに非難され、嘲笑されようとも……

それを、誇りにも思う。

過去を、歴史を読み解く楽しさを最初に教えてくれたのは、当代最高の古代帝国研究者の祖父だ。

悠久の歴史の足跡を辿る崇高さを、実際に大陸中を巡ることと教えてくれたのは、高名な冒険家の父だ。

侯爵家という殿上の地位にありながら、自衛軍という雑多な身分・境遇の人間が集う職場を選択した。

約束されたエリートコースを棒に振って、過酷な環境に身を置いた。自身の力だけが身を守ってくれる場所……そこで生き抜けない人間では、駄目なのだ。

未だ発見されていない、未知なる古代帝国の遺跡。今ではそこは、魑魅魍魎、夥しい魔物の跋扈するダンジョンと成り果てている。

「残念ながらお前に、魔術の才能は欠片も無いのう。」

幼いある日、祖父の友人で大陸五賢者の筆頭・リヴァルス様にはそう告げられてから、父のように魔術で冒険家を目指す道は潰えた。ならば、あとは自分の戦闘能力を鍛えるしかないではないか。

槍。

それが、神が自分に唯一、微笑んでくれたらしい力。だから隊長を……槍の名手・ザルツ＝イルヴァーンの部隊を選んだ。

故に。

この、視界悪い夜闇の中で。
セーヤを拉致し、逃亡を謀った不審者を止める為、自分は自然に槍を放っていた。

だが、外さない自身のあつた渾身の一撃を、相手は必要最小限の動きで避けた。
気配を消し、セーヤを避け、相手の機動力を奪う為に脚を狙った槍は、地面に突き刺さる。

相手は僅かな逡巡の後、再び逃走を謀る。

逃がさん！

どう見ても、セーヤの同意による行動ではないだろう。
奴隷商にしてはきな臭い…暗殺者ギルド？何の為にセーヤを攫おうとしているのか謎だが、むざむざ渡す訳にはいかない。

隊長には悪いが、セーヤを本国に移送後、セラルート家の力を持つてして彼の保護観察人になる腹積もりでいるのだ。

この3日間という短い期間でしかないが、セーヤは確実に、古代帝国言語を習得しているという確信に至った。

個人的に所有していた羊皮紙に書かれた173文字を暗誦し、自分の知らない幾つかの文字も教えられた（確かめる術はないが、父や祖父なら知っているかもしれない）。

断言する。

彼を——セーヤを王宮へと召還すれば、魔術庁の監視下におかれ、『古代帝国期の魔術』究明の為だけに一生を費やされるだろう。自由を制限され、下手をすれば捕虜の如き扱いになるかもしれない。

彼は、奇跡だ。

我々セラルト家に、神が遣わしたとは思えない、奇跡の存在だ。

そして、それ以上に私の良き友人だ。

この3日間を通し、わかった。言葉が通じなくとも、私は彼を友と思っている。

彼は私に、とある古代文字を教えてくれた。

確か…『感謝』…だったか…。

良き言葉だ。本当に、古代帝国言語は奥が深い。

それを私に教えてくれる友を、貴様に攫わせるものか!!

一足飛びで、相手に肉薄する。

腰の剣を抜きざまに、相手の四肢を狙う。

だがどの刃も、相手には紙一重で届いていない。

葉が揺れるように、のらりくらりとした動きで全て避けられる。

強者だ。

自分より数段上の使い手。

セーヤを担いだままでのこの動きは、およそ人間業では無い。

刃の、縦の軌道は決して通らない……。

では、「点」ならどうだ？！

先ほどの肉薄した際に、抜刀したのとは別の腕で投げた槍を掴んでいた。

剣を振り切り、その反動で槍の刃を相手に走らせる。

自分の力量では、生かして捕らえられるような相手ではない。

槍の穂先は過たずに相手の身体へ向かう。

その胴体に、槍の穂先が吸い込まれて――

「壁^{へキ}。」

目の前の空気が、固体化した。

「何？！」

ガッン、という鈍い音を立て、穂先が止まる。
さながら鉄の盾で阻まれた如く。

……いや！

驚くべきはそこではない！

今のは…。

まさか、古代帝国言語？！

その魔術……今は忘れ去られた魔術。

『古代帝国期の魔術』ではなかったか？！

「悪いが、ここまでだ。」

素顔のわからぬ黒頭巾の向こうから、高い声が発せられた。
女？

いや、そこではない。

相手が『古代帝国言語』を使えるのならば……。

「^{バク}爆。」

身体の奥が熱い?!…膨らんで、いく?!

身体が、爆ぜる…?!

「オルス！！！」

耳に、セーヤの叫び声が響く……………。

5話 襲撃者（前編）（後書き）

この作品を読んでいただいた皆様、読んでいただいている皆皆様、
ありがとうございます。

もうすぐこの作品にも女性が登場しますので、お待ちください。

進行が遅い。

もつと戦え。

ヒロインなり何なり、とにかく女を出せ。

エルフは？竜は？まだ？

e t c , e t c . . . のご意見ありましたら、お手数ですが、感想
でよろしく願います。書置きをもつと練り上げます。

5話 襲撃者（後編）

「隊長、9人目です…。」

ミリアムが沈痛な声で告げる。

見張りをしていた兵士達の元へ向かった我々が目にしたのは、外傷もなく苦悶の表情もなく、ただ眠るように絶命した戦友の死体。

20人交替で見張りをしていた。

その20人の内、9人が息を引き取っていた。

この20人は、アックスに任せた兵士達だ。

戦時には遊撃部隊として活躍した、私の百人隊でも熟練度の高い者達…。

遊撃隊の特性上、夜間でもゲリラ活動できる夜目の利く者達…。

そんな彼等がむざむざ殺された…?!

争った形跡も、交戦した様子も無い。

……まるで、抗えぬ眠気に身を任せたかのような姿で、エレスの青草に身を横たえている。

「……生存者はいないか？」

ミリガン含む他の兵士達に聞く。

交替に来た20人の内、私と共にこの場には5人。

他の15人は休憩しているか夢の内にいる者達の元へ、この状況を

伝えに向かわせた。
そしてこの場に残る生存者を捜している彼等からは、次々と死亡の報告ばかりが届く。

絶望的だった。

この絶望感は覚えがある。

10年前の大戦。

マルダイト城での籠城戦――

レヴォン港奪回作戦の決定直後――

サーヴァイブ將軍率いるエヴァルド主力部隊との、正面衝突――

じわり。

心の傷から、血が溢れる……。

倒れている兵士達全員の姿を俯瞰すれば、アックスが駆けずりまわっているのが目に付いた。

寡黙な巨漢・アックスは、まるで戦場で分かれた我が子を探す様に、倒れ伏す己の部下の中から生存者を捜している。

突然の仲間の死は、兵士――もとい軍人の常だ。

今日の昼間のバレルとの戦闘一つとっても、誰が命を落としてもおかしくはなかったのだ。

今、必死に生存者を捜すアックス達。

今、焚火で暖を取り語らう兵士達。

むろん、この私でさえも。

兵士で、戦う身の上である以上は誰もが命をぶら下げて任務にあたっているのだ。

昨日も、今この場も、明日も、はるか先の未来も……。

影のように、自分のすぐ隣に、命を引き連れながら。

だから涙は出ない。

感情は乱れない。

だが心は――――軋む。

怒りが湧きあがる。

彼等を、家族の元はおろか戦場で死なせてやれなかった。

……許せ、不甲斐無き指揮官を。

「全員、注目。」

厳かに告げる。

皆が一斉に立ち上がり、私を注視する。

倒れ伏す仲間に目を奪われる者は誰もいなかった。

――それが、あるべき兵士の姿。

「戦場で、倒れた仲間を気にする愚者にはなるな。」

私が父から、そしてこの百人隊全員は私から言われた、最初の言葉。命を引き連れながら戦うという、覚悟の言葉。

「敵の正体・人数は不明。仲間への攻撃方法も不明。ただ、魔術師の可能性が高い。抵抗魔術の丸薬を飲め。朝までに再び攻撃されるのを覚悟しろ。各自、臨戦態勢。」

弔いは敵の命で。

そう決心した私の耳に、不快な爆発音が響いた。

今日の私は度し難い。

オルスの不在に――今更気が付いたのだ。

思い出したのは、初対面で縛られ、意味不明な言葉で話しかけられたこと。

そして、槍の柄で小突かれたこと。

長身の兵士は、冷静沈着で、表情に乏しくて、他の皆より若干静かに話すタイプだった。

なのに『漢字』という共通の話題を発見した後は、その印象が180度変わった。

3日間、僕は不慣れな乗馬中だというのに、オルスは傍らにへばり付くようにして羊皮紙片手に漢字を聞いてくる。もちろん彼も乗馬中だ。

器用なことを……。そう思いつつ、鞍とずれる内股の痛みに苦しみながらオルスの質問に答えた。

野営中は、初めて握る羽ペンで、初めて扱う羊皮紙に、知っている漢字を何文字か書いた。

オルスは、漢字を二文字三文字組み合わせさせて使う言葉を知らなかったみたいで、教えてあげたらすごい驚いていた。

その驚いた顔が似合わない過ぎて笑ってしまったけども。

馬を見ながら、『馬』。

ダッシュしたのち、『疾走』。

槍に刺された風に演じて、『痛』。

自分の名前の、漢字表記。

そして、彼の食料を分けてもらったあとに、彼に手を合わせて、『感謝』。

『感謝』——教えてあげた漢字の中で、オルスが僕に最初に使ってくれた日本語だった。

羊皮紙に書いた、僕の教えた漢字を指差し、僕の方を指差し、自分

に指差して、僕のしたように手を合わせた後で。

「n e d y g f d k s x 感謝 m i e d h n .」

聞き取れないこの世界の言葉の中に、不釣り合いな「感謝」という言葉を交えて。

久しぶりに聞く、日本語だった。

「教えてくれて、ありがとう。」

そんな風に言ってくれたのかは、正直わからない。

「感謝」の意味が正確に伝わったのかも確かめられなかったし。

でも、嬉しかった。

言葉は通じなくとも、心は通じた。そう、思った。

その、オルスが――

粉々に砕けた鎧が四散する。

僕を担いだままの相手は、また「壁^{へキ}。」と呟く。

こちらに勢いよく飛んできた鎧の破片が、見えない壁に当たったみたいを防がれる。

いや。

破片だけじゃない。

赤い赤い血も。

引き締まった腕も。

羨ましいくらい長い脚も。

へし折れた槍と剣も。

3つに割れた、オルスの頭も。

暗い色の脳味噌を、撒き散らして。

僕を助けに来てくれた、オルスという兵士が、木っ端微塵に爆ぜたのだ。

「オ……ルス……が……？」

死んだ。

目の前で、爆ぜた。

「サテ、行キマス。」

誰のせいで？

僕か？

――そんなわけ、あるか。

「舌嚙ミマス。話ス、駄目デス。」

こいつの、訳のわからない攻撃で、死んだ。

もっと、通じ合えたかもしれない、そんな人を。

……こいつが殺した！！

おお、神よ。

天の最高神・アンセヴェルよ。黄泉の神・ヤタルヴェコンよ。

なぜまだ年若いオルスを、天上界へ召し給うた……！！

私はアックス達と爆発音の元へ駆けつけた。

一体何の冗談だ？！

あの、鎧とも肉塊ともつかぬ屑は、オルスではないのか？！

ぐじゅり。

右足が何かを踏む。

エレス平原の、柔らかい青草の感触ではない。

目を、地面に、向ける。

桃色の、艶々とした細長い肉の、管。

……ああ、これも覚えがある。
戦場で幾度となく見たぞ。

人間の、腸だ。
オルスの腸だ。

最早一目瞭然。
目の前の黒づくめが、セーヤを担ぎあげている。
そしてその黒づくめの前には、四方に飛び散ったオルスの亡骸。

オルスは、セーヤを助けようとしたに違いない。

身体が動いた。
手に持つ槍が唸る。

込める力は、昼間のバレル共とは比べものにならない。

貫け！！

風を切り裂き、劈く音を鳴らし、槍が黒づくめに向かう。

と、投げた槍と同時に、私も相手に接近する。
地を蹴る。

抜刀。

黒づくめはセーヤを投げ捨てた。
黒のローブが翻り、両手に短剣が生える。

二刀の短剣使い。

正規の兵士が扱う短剣ではない。
暗殺者ギルドか！！

槍が短剣に弾かれる。
だが、貴様の目の前には私がいるぞ。

逆袈裟に切り上げる。
肉を斬る手ごたえはない。
黒色のローブだけが切り裂かれた。

瞬間、夜の闇に銀の糸が波打つ。

（女?!）

相手は女だった。

長い銀髪が風に靡く。

……待て、知っている。

暗殺者ギルドに属する、二刀と魔術を操る銀髪の女アサシン。
確か名は――

「ブランド。」

銀髪の方この、酷薄な瞳が鋭くなる。

「……初対面のはずだ。」

冷え冷えするような声だ。

相手の押し殺した殺気が、冷気のように私の肌に突き刺さってくる。

「貴様を知らん軍事関係者はおるまい。レグオンの『1000人殺し』
。」

放り投げられた僕は、背中から地面に落ちた。
一瞬止まる呼吸。

急いで立ち上がろうと、右手を地に着け――

ぐち。

生温い、柔らかな感触を手の平に感じた。

握りしめ、それを月明かりに照らす。

丸く光る物体。

マルスの、眼球だった。

……おかしいな。

普通、この状況だと、吐いていて然るべきじゃないのか…？

初めて見る死体に、内臓に、びびって竦み上がるんじゃないのか…？

おかしい…なんで…

気色悪いよ。

眼球片手に、僕は……

「……オルス……。」

なんで、泣いてるんだ……？

よし。

意図した通りだ。

私の特攻で、セーヤを黒づくめ……ブランデに放り投げさせた。

これでセーヤに攻撃は当たらん！

心おきなくやらせてもらっぞ、暗殺者め。

私達兵士の戦い方を！

「イリガン！！」

私の合図で、背後から30の人影が躍り出る。
イリガン弓兵部隊だ。

「全体、放てえ！！」

イリガンの号令と共に、30の矢が過たずブランデを襲う。

その正確無比な矢を、動体視力と純粋な戦闘能力だけで捌き切るブランデ。

まさに人外の業。

異端の戦士たる暗殺者だ。

「アックス！！」

ならば、我々凡人の「集」の強さを見せつけてやる。

矢を捌き切ったブランデの真後ろに、天を衝くような巨漢が現れる。
怒りに震えるアックスだ。

手に持つ戦斧が、ブランデの頭部に向かう。

一瞬の虚をついた攻撃を、しかし今度は反射神経で避けた。つづく恐ろしい身体能力だ。

だが……やはり避けてくれたな。

何かに気づいたように。

ブランデが、跳ね返るように顔を背後へ。

そこには、衝突しそうな程に接近した「私達」がいる。

夜間に、自軍より圧倒的少数の敵を超近距離で襲撃する場合、武器を捨て徒手空拳で対峙した方が成功しやすい。弓は捌かれる。

武器で向かってでも同士討ちの可能性がある。

ならばこそその「素手」。

魔術師相手にどうか、という作戦だが、既に私を含む全員が対抗魔術の丸薬を摂取済みだ。

戦術級魔術ならいざ知らず、並大抵の魔術は高確率で無効化できる。

ゆえに。

私達は身を守る鎧のみで、ブランデに突貫した。

最も突出していたミリアムの拳が避けられる。

2人、3人とかわされた。

が。

ようやく届くぞ。

メキィ。

私の右拳が、ブランデの顔面を貫いた。
鼻を折り、歯を砕いた感触。

右拳を振り抜く！

鮮やかな弧を描いて、女体が吹っ飛んでいった。

「捕える！！」

兵士達が、地面に叩き付けられぴくりとも動かぬブランデに向かう。

こやつを許すつもりはない。

然るべき対処を取った後、私が直々に斬らせてもらう。
不甲斐無き自身の弱さを嘆くのは、その後だ。

ザルツ隊長達が戦っている。

オルスを殺した黒づくめ――銀髪の女と。

弓矢での攻撃。

巨漢のアックスの、斧。

それらを難なくかわしていた女。

人間の動きではなかった。

少なくとも、今まで自分が出会ってきた人間の中で。

涙で滲む視界の中、ザルツ隊長のパンチが女を吹っ飛ばしたのが見えた。

恐ろしい音がした。

ぐちい。

めきい。

その両方が交わった音だ。

吹っ飛ばされ、地面に投げ出された女はびくりとも動かない。

おかしい。

何かが、おかしい。

何故使わない？

オルスを殺した、あの攻撃を――――

その考えが頭をよぎり、ぞくりと悪寒が背中を走った。
本能の警告。
理屈じゃない、確信とも言える直感。

「近付くなあ！！」

その叫びは、遅く。

「^{バク}爆。」

再び僕の目の前で、人間がはじけ飛んだ。

6話 戦うべき時（前編）

十数人分の返り血に塗れながら、銀髪を真っ赤に染めて、女が立ち上がる。

鼻が曲がり、前歯が何本か折れた口で、それでも言葉の発音は流麗なまま。

感情のこもらない瞳が兵士達に向けられれば。

「爆^{バク}。
」

また、何人かの兵士が爆ぜて散る。

アックスが、斧を振り上げて女に向かった。

駄目だ！アックス！

「斬^{ザン}。
」

アックスの巨体が、腹から横断された。

斧を振り上げた姿勢のまま、アックスの上半身がずり落ちていく。

ぶばっ。

そんな擬音と一緒に、内臓が飛び出した。

命がまた一つ消える。

「爆^{バク}。」

やめろ。

「爆^{バク}。」

やめろ。

「爆^{バク}。」

やめろ。

やめろ……頼むから……。

震えが止まらない。

身体が震えて言うことをきかない。

漢字を…、僕の母国語を、そんなことに使うな。

人と心を通わす言葉を、そんなことに使うな。

兵士が爆ぜる。

どんどん爆ぜる。

地面が真っ赤な川になる。

肉が、草を覆い隠していく。

続々とやって来る、待機していた兵隊達。

ザルツ隊長が何事かを叫びながら彼等を阻む。

「来るな!!」「逃げろ!!」

そんな風に聞こえた。

こんな時でさえ冷静な表情で、でも泣き出しそうな顔だった。

兵士達は、ザルツ隊長の叫び声で逃走を図る。

——でも女の声がそれを許さない。

「^{ザン}斬。」

10人20人いやもつと多く。

兵士達が、一斉に横断されて死ぬ。

殺戮は止まらない。

ザルツ隊長の判断が、間に合わない程に。

それはそうだ。

漢字は、一文字で意味が通じる象形文字。
その速度に誰が逃げ切れるものか。

「セーヤー!」

女が他の兵士達を虐殺する中、ザルツ隊長が僕の元へ駆けつける。
……自分の大切な部下が、死に行く中。
つい3日前まで赤の他人だった、僕を案じて。

その、隊長の元に。

「u y e s t h f g , j h 8。」

高い、女の声が、ザルツ隊長の後ろから。

はっとして振り返る、ザルツ隊長。

音も無く、女が傍らに接近していたことに、僕は気付けなかった。
身体が恐怖で震えて、隊長を助けることも、女を止めることもでき
なかった。

「^{ザン}斬。」

刹那。

隊長が、身体を無理やりに動かして地を転がる。
だが――

飛んだ。

隊長の、両足が。

w y a a a a a a a a ! ! ! ! !

ザルツ隊長の悲鳴が響き渡る。

止血しようとしているのに、身体が――両足を失った身体が、
上手く動かないのか。
地面をのたうつ。

「ザルツ！」

声しか、出せない。

駆けつけたいのに、足が動かない…。

動
け
！

動け！

くそ！止まれ、止まれ、止まれっ！！

何震えてるんだ……！

隊長を助けに行くんだ畜生！

動け！動け！動け！

動け！！！！！！

動いて、くれよ……。

隊長は、死んではない。
でも戦闘不能になった。

多分、失血死で程なく死ぬ。

僕は、それを見ていることしかできない――

ザルツ隊長の醜態に満足したのか、女は僕の方に振り向く。

背筋に、さつき以上の悪寒が走った。

身体の震えが、一気にゲージを振り切った。

――にいい。

無表情が、一転破顔。

嬉しい度が過ぎたみたいに、顔全体を歪めた醜惡な笑顔。

女は、齒を剥き出して笑った。

僕に近付く。

伸ばされた左腕が、オルスからもらったロープを引きちぎった。

スウェットの胸倉を掴まれ、一気に引き上げられる。

足が地面から離れる。

本当にとんでもない膂力だった。

「アナタノセイ、私傷ツキマシタ。凄イ痛イデス。誰ノ、セイデス？」

女は首を傾げ、僕に問う。

恐怖で縮こまりそうになる身体。

その口に、空いた女の右拳が飛び込んできた。

ぐちいっ

齒が折れる。

ぐちいっ

鼻から血が溢れる。

ぐちいっ

唇が切れる。

ぐちいっ

ぐちいっ

ぐちいっ

ぐきいっ

「ココラヘンデ、アナタ許スデス。スミマセン。コレ、エエト、確
カハツ当たり言イマシタネ？ソレデス。」

「……じゃ……けんな。糞った……ね。」

口が上手く動かない。

鼻が血で詰まって、息ができない。

でも身体の震えは、激痛が消し去ってくれた。
もう、震えはない。

6話 戦うべき時（後編）（前書き）

ある読者様から、後学となる御意見をいただきました。

そのため、誠に勝手ながら各話を繋ぎ合わせたり、サブタイトルを挿入したりしました。いらぬ混乱を招くかとは思いますが、ご容赦下さい。

これからも、一人でも多くの読者様に楽しんでもらえる作品にしていきたいです。

6話 戦うべき時（後編）

生まれてこのかた、殴り合いなんてしたことがなければ、兄弟喧嘩もない。

精々、罵倒し合う口喧嘩くらいが関の山だ。

大体事勿れ主義者の僕にとって、拳と拳をぶつけ合う世界は漫画やゲーム、映画の中のお話であって、ともすれば一種の「異世界」のような認識だった。

なんの因果か――

その、僕が今いる所が、本物の「異世界」なのだけけれど。

だからだろうか。凄く熱い。

心が、身体が、熱い。

今まで生きてきた中で、本気の怒りを感じたことはなかった。怒髪天を衝くなんて故事が、自分に舞い降りる状況など予想だにできなかった。

でもここは、僕にとっての「異世界」だ。

かつての居場所では思いもよらないことが起こる場所。かつての常識が通用しない場所。

だからだろうか。凄く熱い。

この熱さは、感情の昂りだ。

怒りが、憤怒が、僕の心を塗りつぶす。

恐怖を、震えを、瞬く間に浸食していく。

命の危機になると、覚醒する主人公。そんなありきたりで、王道なストーリーの冒険活劇。

皆がそんなお話を好む理由がわかる。

こんな時、圧倒的な力の相手を倒す、そんな力が欲しい。

神様……。もしない神様。でも、もし本当はいるんだったら、お願いします。

虫のいいお願いは承知です。でも、もしそれでも聞き届けてもらえるなら、お願いします。

このクソツタレな女に、一矢報いる力を、下さい――

ごぼり。

切った口内に溜まった血が、口から垂れ落ちる。

それがトリガーだったのか――

脳裏に、さっきの虐殺風景が蘇る。

――ああ、そう口ずさむだけでいいなら。

自重気味の頬笑みが漏れて、それを見た女が、少し表情を曇らす。

「爆。^{バク}」

そんな虫のいい話があるわけない。

だから、これは「異世界」が起こしてくれた奇跡だろう。

女の表情が驚愕に染まり、僕を急いで投げ飛ばした。
瞬間。

女の左手が、豪快な音を立てて爆ぜ飛んだ。

短い滞空時間の中、僕の口が動く。声は出ず、唇が動いただけで。

「ざまあみやがれ。」と。

油断した、油断した、油断した！

こいつは『古代帝国言語』を知っている。いや、それが母国語の「異界人」だ！

でも、なんでいきなり魔力が発動した？！

あの男の話では、召還された異界人がいきなり魔力を発動させることは皆無。

未だかつてそんな前例などないと、断言していたではないか。

……いや、これは私のミス。

レグオンの『100人殺し』たる私が、初めて得た力——絶大な力——の為に、慢心した結果なだけ。

イレギュラーな事態を想定できなかったこちらの過失だ。

左手は……帰還後に魔法で蘇生させればいい。完全な蘇生に暗殺者稼業は2ヶ月程は休業か。

身体が爆散しなかっただけ儲けものだ。

古代語魔術は『壁^{ヘキ}』と『爆^{バク}』と『斬^{ザン}』のみ。
ならば、魔術で眠らせるしかない。初めからこうして捕獲しておけばよかったと思うものの、それこそ詮無きことか…。
捕獲対象でなければ、私を傷つけた報いを与えられるというのに、
歯痒い。

警戒しながら、女が近付いてくる。
殺されるのか、口を封じて連れ去られるのか。
どちらにせよ、僕の自由が奪われる。
奪われるのなら抗ってやる。

痛めつけられたのは顔だけだ。
腹は据わった。身体に力を入れて、一気に立ち上がる。

女が、僕に右手を向け何かまくしたて始めた。
何だ?! 早口で、まるでこれは——魔法?!

女の手から、何かが迸る。光の様な、もやのようなもの。
身体が動くとはいえ、反射神経は良い方じゃないし、突然のこと。
避けられない——

「壁^{ヘキ}——!!」

だから咄嗟に口から出た言葉だ。目の前の空気が、固形化した。

バシユッ！

蒸発したような音を立てて、光のもやがかき消える。

物理的なだけではない、魔法？みたいなものも防げるのかこれ！

脳裏に電流が走る。

歯車がかみ合う感じ。

なんだ？身体が熱い。熱が湧き出てくる。身体全体が、熱に包まれる。

バク、ザン、ヘキ——僕の予想が正しいのなら、「爆」「斬」「壁」の音読みのはず。

なら、それ以外の漢字を音読みした時、頭の中でその漢字を想い浮かべて言えば、発動する…？

「文字通り」の結果が…？

ぞくり。と、身体が震える。

これは悪寒じゃない。快感だ。

女を、倒せる力が自分にあることがわかった。攻略の道筋が定まった閃きへの、確信からだ。

身体の熱さが尋常じゃなくなる。

ああ、もう限界だ。爆発したい。声を張り上げ、思いっきり叫ぶ。

——吹き飛ばせ！！

「爆破^{バクハ}アアア——ッ!!!!」

身体中の熱が、一気に大気中に放出される。

一瞬の静寂。そして——

女の立っている地面が、下からせり上がる。

亀裂が走る。地響きが起こる。

光が、地の底から噴出した。

女が顔を青ざめて何事かを呟いている。遅いよ、馬鹿。報いを受ける。オルスの、ザルツ隊長の、皆の報いを！

爆音と共に、まるで間欠泉の如く女の立っていた周辺丸ごとが、一気に吹き飛んだ。

「……糞っ！」

ボロボロになりながら、私は異界人に近付く。意識は——ないみたいだな。当たり前だ、あんなに一気に魔力^{ヒギナー}を放出すれば、初心者が失神するのは当然だ。

——危なかった。

残りの魔力をありったけ込めて、即座に最大防御魔法を自分の身体に「まとりつかせ」なければ、塵芥になっていたよ、異界人。本当に、なんて威力だ。戦術級魔術にも匹敵する。

それを、魔術の魔の字も知らない様など素人が、気合いで成功させるなんて未恐ろしい。

…なるほど。だからこそその「召喚」。だからこそその「異界人」。

そして、『古代帝国期の魔術——古代帝国語——』が秘匿される理由、か。骨身に染みた。

「…惜しかったよ、異界人。」

当初は彼の捕獲のみの仕事だったが、結果的に彼を知る者もまとめて抹殺できたし、よしとしようか。
私の身なりは散々なものだが。

意識のない異界人に、さらに声を封じさせる魔術を施し、担ぎあげる。

……相も変わらず、軽い。なのに、今の私の体調ではひどく重く感じる。

糞。早く帰還して治療を受けないとね。

私は脚に力を込め、残り僅かな魔力で空に飛んだ。

6話 戦うべき時（後編）（後書き）

PV1万5千超、ユニーク1千超感激です。
ありがとうございます。

今回で第1章は終わりです。次回から第2章となります。

1話 異世界セカンド・コンタクト（前書き）

今回から第2章です。

投稿期間が開いてしまい、申し訳ありませんでした。

1話 異世界セカンド・コンタクト

まだ明け方の薄暗い執務室。

完全に溶けかかった蠟燭の炎の明かりを助けに、立派な机に腰を下ろした男が手許の書類を眺める。

その書類はつい数日前に、ここレグオンの北東の隣国・エス・レス・カーンの王都直前の街道で奪った、1枚の機密書類だった。

文責はザルツィルヴァーン——10年前の大戦の英雄の一人——となっている。

何度見返しても、若干の冷や汗を感じた。まさかこうも短時間で、ピンポイントに異界人と接触されるとは…。

この世に絶対はない。どんなに確率が低かろうと、起こりえる事象というものは存在する。

しかし男にとって、この機密書類が王都に届けられる水際で防げたのは僥倖だった。

馬主はまだ若い新兵だったらしいが、いただけない。伝令、早馬等という者は、一秒先に死ぬ様な、そんな過剰な警戒心無くして務まらない仕事だぞ？

その教訓の代償に命を落としてしまったようだがな…。

男の頬が吊り上がり、笑みが浮かぶ。柔らかな、しかし冷酷な笑顔だった。

大戦は終結した。

かつての帝国はその国力を落とし、西領での権威を失墜させて王国に弱体化した。

弱小国家群が悲願の独立を果たし、中立国だったはずの賢者の国が西領のヘゲモニーを担った。
新たな秩序が生まれ、その齒車を上手く噛み合わせるのに10年の歳月がかかった。

しかし、未だこの西領は平和ではない。

どだい「国家」と呼ばれる集合体が幾つも存在している状況。平和に成りえないものだ。

同盟国などと綺麗に言葉を飾ろうが、隣人とは即ち自分のテリトリ―を脅かす者でしかない。

仮初の和平条約が口約束と同義ではないかという疑問に、誰が否定を唱えられよう。

西領は未だ下火の戦火の中に在る。

今はただ、その下火を大きく燃やす材料が見つかっていないだけだ。材料――世界が「戦争」という行為でまとまるに値する「理由」――

――その、口火を切る着火剤。

そう――例えば、「古代帝国期の魔術」なんてものは、どうか。

今は失われた魔術体系、秘匿されし文字群を理解する「存在」を、「召喚魔術」に賭けてみればいい。

多元世界の何処かに、広大な砂漠中の一粒の砂金、夜空に瞬く無限の星の一つ、瀑布に噴き出す泡沫の欠片の如く、「古代帝国語」を解する者の存在を賭ければいいではないか。

召喚魔術を最初に実践した上古の名もなき賢者のように、未知なる存在ゆえ無限の可能性――それは即ち「全能」――に賭け

ればいいではないか。

この世に絶対はない。どんなに確率が低かろうと、起こりえる事象というものは存在する。

そしてそれは、「信じて疑わない思いの数だけ」存在する。まるで、多神教の神の如く。

人の想像力こそが万物の霊長たる証であり、その想像した産物を欲して数多の犠牲を払い実現する創造力こそが、人の生まれ持つ原罪ではないか。

ゆえに、是。

いかなる手段をとろうと、それが人の、人間の証。
ゆえに、是だ。

男は蠟燭の火を指で掻き消し、窓の外を眺める。
世界を巻き込む戦火の中心。いずれそんな存在に男はなるだろう。

男の名はバドルモア。
レグオンに本拠を構える暗殺者ギルドの長にして、静哉をこの世界に召喚させた原因を造り出した男。

「失礼します。」

静寂を破る、硬質な音。

控え目なノックの後に聞こえてきたのは、若い女声。

「なんだ？」

窓の外を見ながら、バドルモアは声だけで応対する。
女の声は、目的を続ける。

「ただ今ブランデ様が、捕獲対象と共に御帰還なされました。ブランデ様は重傷を負っておりましたが、命に別条はないとパズ様が。」

「今行く。」

踵を返し歩き出す。

その顔に満足そうな笑みを張り付けて。

自身の描く、大戦への着火剤を見定める為に。

「しかし、まあ、なんだ……。……。これはまた、こっぴどくやられたなあ、ブランデ。」

酷く心配するようで、でも軽薄そうないつもの雰囲気隠しきれない男の声が、私にかけられる。
傷の治療をする度にいらぬ所まで触ってセクハラしてくる彼が、

今日に限っては真面目に治療してくれた。

……当たり前か。

彼の生まれつき軽薄そうで陽気な声色は健在だが、それ以上に治療に専念する真剣味の方が勝っている。それもこれも、私が左腕を「爆ぜ飛ばされた」為だ。

「奇跡」級の魔法師の彼でも、この失った左腕を完全に復元させるのは容易ではない。

三日三晩、不眠不休で処置をされると言われた。少し、罪悪感。

暗殺者ギルド所属の魔法師・パズⅡアンゼルド。

「聖職者」を追放された破戒人。西領では、なかなか名の知れた魔法師だ。

まあ、私程ではないが。

私は今、自由都市・レグオンに居を構える暗殺者ギルド本部に帰還している。

時刻はもう正午。

エレス平原で異界人の捕獲に成功し、最短距離を疾走して明け方、レグオンに到着した。

途中、私の慢心から異界人を保護していたエス・レス・カーンの一軍と交戦し、殲滅させたが、異界人の存在を知る者を抹殺できたので、パズ曰くお咎めはないらしい。

しかし、この重症の中、ここまで人一人担いで帰還は中々に骨が折れた。

エレス平原からここレグオンまでは、南西に向かって最短距離でお

よそ40クリック。

その距離を、夜が明けるまでのおよそ5時間で走破した。

途中、左腕の止血して時間がかかったが。

小鳥が囀り東の空が白やむ夜明け頃、私はレグオンへと辿り着いた。

暗殺者ギルドがこの都市の独立を守る示威的存在とはいえ、都市民が私達暗殺者に親しみを持つことはない。こんな左腕が弾け飛んだグロテスクな姿を門兵に見せられるはずもなく、私は自身の本拠地に潜入するという有様だった。極力人目につかないよう本部を目指したが、なんと間抜けな姿か。

本部到着後、駆けつけた仲間に捕獲した異界人を預けた私は、失血と魔力の枯渇で気絶したらしい。

そして今現在に至る。

目覚めた私の横には、私の左腕の治療をするパズの姿があった。

「『100人殺し』のブランド様をこうまで痛めつけるなんて、あの異界人、中々やりやがるな。」

軽口を叩きながら、知る者が見れば、顔を冷や汗と驚愕で染まらせる超高度な魔力操作で治療し続けているパズ。

「・・・歯痒いな、本当。私をこんなに傷付けた相手を、八つ裂きにできないなんて。」

傷付けられる前に顔をしこたま殴った報いかな、と呟いたら、お

お、怖い怖い、とパズはおどけて笑った。

「だからあんな不細工なツラだったのかよ。駄目だぜブランド、捕獲対象への暴力は禁止だろ？ かわいそうに。」

「…八つ当たりだったのは、自覚してるよ。」

でも、どうせこいつが異界人の顔の傷も治してやったんだろっな。パズのことだ、暗殺者ギルドに所属しながら、なんだかんだこいつは優しい。

「ま、異界人の傷も俺が治してやったけどね。感謝しろよ？ ギルド長からの叱責を無くしてやったんだからな。」

ほら、やっぱり。

「…だから、今度一発——痛っ?!」

蹴りを一発、パズの脚におみまいしてやる。これが必要ならばさぞモテるだろうにね。

ふと、会話が途切れる。

・・・ああ、そういえば。

「その異界人、今はどうしてる？」

一応声を封じる魔術で声を封じているが。

「ああ、あいつなら——」

意識が戻れば、平原の青々しい草花も、視界一杯の星空もなく、ただ冷んやりとした石の感触。

壁から伸びる鎖に着いた、頑丈な手錠が両手首にはめられた重さ。身動きできない窮屈さ。

顔面の痛みはもうなかったけど、両手が塞がっている今は顔の傷を確認する術はない。

薄暗い石造りの小部屋には、松明の明かりしか光源がなかった。

初めて嗅ぐ松明の香りにむかむかしながら、まだぼやける視界を戻そうと集中し始めた時、目の前の鉄格子が不協和音を鳴らしながら開いた。

寝起きざまにこの甲高い音。耳が、痛い。

入ってきた相手を確認する間もなく、一方的に声をかけられる。

「調子はどうかな、異界人君？」

そして、僕は絶句した。

あれ？

え？あれ？

気付いたら僕は異界にいて、言葉も通じなくて、頑張って身振り手振りで意思疎通を図っていたんじゃない？
なんで、相手が日本語を話している…？
もしかして、今までの夢だったんじゃない——

……ん？「異界人」？

「っ！！……っ？！」

そして、二度目の絶句。

は？声が出ない、え？

声を出しているはずなのに、出るのは呼吸音だけだ。なんだこれ？
！気持ち悪い！

「…おっと、そうか。ブランデの魔術か。」

相手はわけのわからないことを言って納得し、何事かを早口で呟いて僕を指差す。

人差し指から発射された、薄紅色の光。尾を引く、光の線。

瞬間、身体が強張る。

—— 思い出すのは夜の平原での虐殺。銀髪の女の魔法（だと思
う）でオルスが、ザルツ隊長達が、死んで——

そんな僕の怯えを察知したのか。

「怖がらなくていいよ、異界人君。」

相手の言葉。

光は吸い込まれるように僕に当たり、何の衝撃も感じないまま、すぐさま消えた。

「…い、今の、は……。…っ?！」

声が、出る！

「そう言うことだ。」

ようやく視線を相手に向ければ、松明の逆光で顔は良く見えないが、この牢屋？の天井につきそうなくらいの高い身長。

黒っぽい服の上からものはつきりとわかる、がっしりとした筋肉質な体格。

薄暗い室内でも鮮やかに輝く、長い茶髪をオールバックにまとめた年齢不詳の男だった。

男が僕に放った光は、声を出す魔法？だったらしい。

あれ？昨日、あの銀髪の女を吹っ飛ばすまで声は出ていたような…？それより、意識がなかった間に、いきなりここで目覚めたのも何でだ？

元の「世界」に返ってきたわけじゃない。それは、目の前の男が魔法？を使ったことからわかる。

「あの…っ！」

「なんだい？」

男は、まだ出し辛くてどもる僕の声に、微笑みながら答える。
柔らかな声色は、万人が万人、誠実な人だと思っ印象を受ける。

でも僕の身体は、本能は、警鐘を鳴らしていた。

初めてあの森の中で意識を覚醒した時や、乗馬中に平原で謎の生物の接近を確認した時に似ている。

元の世界にいた時は、身近に危険なんてそうそうなかったし、起こり得なかった。

だけども今。

この「異世界」では、僕の予想や経験なんてすっ飛ばして、危険がやって来る。

防衛本能のために第6感に目覚めたのか、文明離れしてきた結果なのか、僕に身に着いた危機察知能力は告げている。

危ないと。

この男が、危険だと。

もしかしたら——こいつは、あの銀髪の女の仲間なんじゃないか？根拠は、ないけれど。

無条件で怒りに震えそうになる身体を、押し止める。

……なに憶測や先入観で怒ってたんだ、自分。冷静になれ、恥ずかしい。

……。

瞑想して、落ち着く。

今は、質問する好機。

ここはどこで、お前は誰か。

何故僕はここにいて、言葉が通じるのか。
そして、あの女は死んだのかどうか。
コミュニケーションが取れる、今だからこそ。

「ここは、どこですか？」

「レグオンという都市だ。まあ、今君がいるのは、その都市に存在するギルド管轄の独房だがね。」

レグオン？ギルド？

ギルドは、確か西洋の同業者組合のことだ。
つまりここは、商人なりなんんりの組合施設の牢屋ということか？
というより、この世界にも元の世界のような名詞があることが不思議だけど…。

この男は、とてもじゃないが商人には思えない。

…次だ。

「なんで、言葉が通じるんです？」

これだ。これが一番わからない。
相手の顔立ちは、ザルツ隊長達のように白人でゲルマン系。銀髪の女も、白人系だったように思う。

あの銀髪の女は何故か日本語を話していたが、この男のように完全な日本語ではなかった。

もしかして、この世界には日本語が（もしくは、この世界で別の固有名を持つ日本語と同じ言語が）存在しているのか？

僕が出会ったことのないだけで。

「君は、気付いたらこの世界にいて、言葉も通じなかった。見るものは全て、初めてだった。ちがうかな？」

「……そうです。」

男は、僕の質問にすぐに答えない。焦れたいな。

——それに、発言の内容。

なんだ？こいつ。僕の何を知っている？

「私が最初に「異界人」と言ったこと、覚えているね？」

「はい。」

「断言しよう。異界——あ、そうだ、ちょうどいい。名前は何と言っのかな？」

「……まず自分が名乗るのが礼儀でしょう。」

……少しイラついて、棘のある言葉遣いになってしまった。

今は忘れる。

オルスの死を。ザルツ隊長達の死を。

こいつから、聞けるだけの情報を得るんだ。

何故、ここにいるのかも忘れずに。

最初の予想が、当たっている気がしてきた。

「異界人」だとか、僕の近況を知っているような話し振りが気になる。

——予想通り、この男が銀髪の女の仲間だったら。

躊躇なく、殺してやる。

「これは失礼した。」

にこやかな表情は崩さず、男は一礼した。

芝居がかった素振りは様になっているが、気に食わないことは変わらない。

「私はバドルモアⅡデイモ。この独房を管轄するギルドの長だ。君は？」

「…晴哉です。」

「ふむ、セーヤ、か。」

あれ？名前の発音だけはザルツ隊長達といっしょなのか。

「では、セーヤ。言葉が通じる疑問だが。」

そう言つて、男——バドルモアは、自身の両耳と首に手をかけ、何かをはずすと僕の目の前に差し出した。それは、金色の小さなピアスと銀色の綺麗なネックレス……だと思ふ。若干、不思議な形状をしているけど。でも、これが何だと？

そのピアスとネックレスについて何の説明もしないまま、バドルモアは再びそれらを身に着ける。

「断言しよう。セーヤ、ここは君のもといた世界ではない。君からすれば「異世界」だ。ゆえに本来なら、この私にも君の言葉は通じない。私も、君の世界の言葉を話せない。」

——まさか。

何か気付いた僕の様子を窺って、ニヤリと彼は笑う。

「聡いな、セーヤ。そうだ。このピアスとネックレスを身に着けて

いるからだよ。嘘のようだろう？魔術でも、魔法でもない。こんな小さな装飾品が、言語変換という高度な事象を起こしているのだ。」

高らかに言いきるバドルモアだったが、僕からすれば、信じられない……ということもない。まず、自分が異世界にいるということが信じられないので。

が、確かにこの男の言う通り信じられない。

見たところ、本当にただのピアスとネックレスだった。原理不明なのは、どうやらこの男にとってもそうらしい。彼の口調から察するに、この世界でも、か。

僕からしたら、魔法の方が信じられないけども。

というか、魔術と魔法？同じものではないのか……？分類されている？

思案して押し黙る僕。

「……ふう。」

溜め息。そして。

彼はこれ以上の質問は辞め、といった感じで手を打つ。

「さて。君からしたら、もっと聞きたいこともあるだろう。だが――

――」

何だ。怪訝な顔で、彼を見つめるが――

「その手錠を外すから、まずは風呂に入りなさい。再びの失礼だが、少々臭うのでね。」

……。

そう言われ、一気に顔に血が上った。

ああ、そういえば最後に水浴びしたの、何日前だったけ？

2話 追悼（前書き）

同じ建物の中に仇がいるって、想像してていいものじゃありませんでした。

2話 追悼

「……すげえ。」

およそ30畳の広さの部屋に、2つの大きな浴槽。

石造りの床以外が木造だからか、こんこんと湧き出るお湯の湯気で部屋全体がサウナのように蒸し暑い。木が腐らないのか心配になる。天井の通気口がなければ、久しぶりに「湯に浸かる」僕は、入る前からのぼせてしまっただろう。

西洋人に入浴の習慣はない。そんな認識が日本人にはある。

でも、それは入浴の頻度の問題だろう。大体にして、お湯を沸かし湯に浸る等、水源豊かな地域じゃないと無理な行為じゃなかるうか。ここは異世界だし、最近では、あまり元の世界の認識を持ち出すのもどうかと思い始めたが。

手元の桶に湯を入れ、手を湯に着ける。湯加減は少し高めだった。だけど、今まで肌寒い石の牢屋にいて下がった体温には心地良い。桶で何度かけ湯をして身体の垢を落とすと、少し信じたくないくらいに垢が出た。

——地味にへこむ。これは、臭うだろうな…。

かけ湯の後に軽く頭から湯を浴びて、思い切り浴槽に浸かった。久々のお湯の温かさに、強張ったままだった筋肉が弛緩する。やっぱり、冷たい川の水ではこうもいかなかった。あと、垢も落ちにくいし…。

何度か顔をお湯でぬぐい、広々と身体を伸ばす。

実家の田舎を離れ、ユニットバスの下宿先で一人暮らしを始めてからはあまりしなくなったが、僕は入浴しながら考え事をするタイプだ。

久しぶりの入浴。

そして久々に入浴中に考える事——初めて、目の前で親しかった人達が、殺された事。

——そして、直接的ではないにしろ、僕も人を殺したかもしれない。

……何故、自分は、こうも落ち着いている？

肩まで深く湯に浸かりながら目を閉じると、ザルツ隊長達との3日間が蘇る。

金髪のジェラルド・バトラーそのままの隊長が、謎の生物を槍で3匹一辺に貫いたこと。

湯で少し沁みる、乗馬している時にずれた内股を撫でると、オルスと漢字について話し合った情景が瞼の裏に浮かんだ。

馬鹿みたいに重い斧を担いで、鹿に似た生物を獲ってきたアックス。
本当に僅かな時間だけど、弓を引かせてくれたイリガン。

夜に焚火を囲んで、僕の知る歌を歌うと乗って踊ってくれた、兵士達。

血。

肉。

血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉
血肉
血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉血肉
血肉

「——っ!」

湯から飛び出る。

身体から髪から、ぽたぽたと滴り落ちる水滴。

赤い滴。

血の水源。

フラッシュバックする。

爆ぜた。目の前で、オルスが爆ぜた。

斬られた。目の前で、アックスの腹が、ザルツ隊長の両足が斬られた。

皆を殺した、銀髪の女。

その銀髪の女を、僕も殺した——多分、殺した。

ガン！

拳で、自分の頬を殴る。

一瞬の衝撃とその後の痛み。

意識が少しだけ、クリーンになる。

何が「落ち着いている？」だ。

馬鹿馬鹿しい。格好つけるのもいい加減にしろ。

悲劇のヒロインでもあるまいし、嫌だね全く。モラトリアムめ。

ただ、認めたくなかったただけだろう。

皆が死んだこと、自分が何もできなかったこと。

泣いたらそれが、本当のことだってわかってしまうから。実感が、生まれるから。

再び浴槽に浸かる。

髪からは、まだ水滴が滴り落ちる。

それに交じって。

「……うええ……。…ひつく…。」

涙が落ちて、嗚咽が漏れた。

「——なるほど。」

パズから異界人への概要を聞き、私はベッドに寝転がった。

ギルド長・バドルモア様からの指令は、このまま本部の医療施設で完治するまでは待機。

あの異界人——セーヤ？セヤ？には、エレス平原で私が死んだことにして絶対に顔を見せないこと。
と、いうか。

古代帝国期の魔術使いって言っても所詮は魔術^{ヒギナー}初心者。
正規の修行も訓練も受けていないと素人。

力ずくで言う事を聞かせればいいのに「放し飼いのほうが面白いじゃないですか。」って……。

つくづく思う。

あの人は、狂い過ぎて正気なだけだ。

ま、その後言われた「これからの計画」の方が数倍狂った内容だったけどね…。

「…よし、骨格は終わったぞ、ブランデ。」

パズに言われ、思考していた意識を左腕に向ける。

左腕にはパズの魔力で指向化された、白色光による骨が形作られている。

これが私自身の魔力と結びついて、本物に近い骨へと変態するのに
およそ27時間。

その間に、骨を覆う筋繊維・神経系・毛細血管に動静脈・真皮に表皮に皮下組織を、再び魔力で形成する作業と相成るわけだ。気が遠い。実際治療するパズは私以上だろう。

私の魔力が「元の左腕の全容」を「覚えている」から、ベースとなる魔力を他者から補填されると、能動的に欠損部を再生し始める。

「魔法による治療」の大前提だ。

だからといって、欠損部の組成——血管・筋繊維・骨格の位置・本数・流れ・組み合わせ——が正しい加減でお座成りだと、後遺症になる。

まあ、見た目完治しているように見えても、それは魔力が「形作っているだけ」で、やはり1ヶ月2ヶ月安静させなければ完全ではないけど。

腕の立つ魔法師の条件とは、その頭脳に詰め込んだ正確無比な人体への理解。

人間の内外組織の膨大な知識。損傷の種類に合わせた臨機応変な治療アプローチとその道筋予測。

それらを極めた魔法師は、まさに現世に「神の身業」を体現せしめる「奇跡」の存在。

「奇跡級」という、「戦術級」と対を成す称号の理由。

しかし、その為に歩む道程の過酷さ故に、多くの魔力保有者が魔術師となる。

魔法を扱う者の代名詞・聖職者も、その多くは「比較的良好な加減な目測で治癒可能」な「軽症」や、「魔力の過重補填」による「体内の免疫力強制強化」で治癒可能な「疫学」方面の魔法師だ。

彼の——パズのように、人体形成のスペシャリスト（私が思う

真の魔法師）は、本当に極僅か。

そして彼ほど人理解の深い魔法師は、エス・レス・カーンのウルディアス枢機卿を除いて、西領には存在しないだろう。

「お前に、もう少し魔力が残ってたらなあー。」

だるそうに首だけを回し、パズは溜め息をつく。

そう、今の私には、体内にほとんど魔力が残っていない。

エレス平原での戦闘で、ようやくコツをつかんだ古代帝国期の魔術を乱発し、異界人の放った戦術級を防ぐ為に最大防御魔法を使い、無声魔術で捕獲した後は左腕の失血と運搬になけなしの魔力を割いた。

その結果が、今。治療時間は嫌でも長くなる。

ざまあない。『100人殺し』も形無しだ。

しかし、何度も思う。

ギルド長も、セーヤに対してよくあそこまで残酷な事を考え付くなと。

生粋のサドか。

狂者の果てか。

10年前の——私に染み付いた幼少期のトラウマの大戦期、さんざっぱら殺しまくった頃のあの人に戻りつつあるのかも知れない。いつものように柔和な笑み。優しい口調。だけど、その身体にまとった空気が狂ってた。

私が寝ている時、もしあの人に近付かれたら、問答無用で殺そうと

するくらいに。

私知らない、全世界が舞台の戦争。
あの人なら、絶対連れて行ってくれる。

その為なら、私はたくさん人を殺そう。

たくさんたくさん、たくさんたくさん。

「…おいおい、その顔は標的にだけ向けてくれよ？　びびって手許
狂うって。」

「…悪い。」

パズに言われ、表情を引き締めた。
昨日少し殺しすぎたかな…。

2話 追悼（後書き）

少し短いですが、8話終了です。

晴哉の心境を上手く書き表せたか心配ですが、今の自分の精一杯でした。

ザルツ隊長達とのお話に比べると、文章の書き方の毛並みが変わりましたがご容赦下さい。

3話 執務室にて

部屋に付いたプレートにはどうやら「執務室」という意味の文字が書かれていたらしい。

それを知ったのはその部屋に入ってからだったけども。

この建物——バドルモア曰く「彼の」ギルドの本部。もちろん洋館。

洋画で見るようなこの建造物は2階建てで、予想通り横に広がった。最初に拉致られていた牢屋はもちろん地下。

その後に向かった入浴室（と彼は言っていた）へ向かう廊下も入浴室自体も、外の様子を窺い知れるような窓は無かった。

ただど入浴室から執務室までの道程では打って変わり、いくつもの窓を見かけた。

窓のない建物なんてあるはずないよな、うん。

それとなしに外を見れば、まさに想像そのままの中世ヨーロッパ的な都市風景が広がっている。

「場違いすぎる…。」

「nutdwdnu?」

「あ、いえ、なんでもないです…。」

目の前に先導する、（多分）バドルモアの命令で案内をさせられて

いる金髪の女性に、心配そうに声をかけられる。
いえ、場違い過ぎる自分を憂いてつい言葉が出ただけですから、はい。

どの方角へ、方向へ向かっているのかもわからないが、女性に先導されるままに向かう。

道なりで様々な人に出会ったが、皆が皆、何らかの武器を携えた男か女達だ。

中には明らかに自分より年下の者もいた。

その中でも、小学生程度の男の子が槍を持っているのを見て、ひどく悲しい気持ちになった。

「少年兵」——かつての世界では嘆かわしいその職業も、この世界ではどうなのだろうか。

もしも飢えずにいられる・食い扶ちがある、という希望に満ちた風潮だったら——

別に僕は、それに対して嘆きはしないし批判するつもりもないが、ふと思ってしまう。

動物だって共同体のテリトリーを守るのは成獣なのに…、と。

執務室はこの洋館2階の奥にあった。右か左かで言えば、洋館中央の大階段を基点にして、右側。
女性がノックを3回。

「m i w s .」

中からは、バドルモアの声色で、こっちの世界の言葉での返答。

やっぱり僕と話すとき意外ではあのアクセサリーに用は無いらしい。部屋に入るなり、第一声が「ようこそ、執務室へ」。アクセサリーいつ着けた？

着けたままでもこちらの言語が話せるのか？わからん。

促されるままに部屋に備え付けられたソファに座らされ、女性は慣れた手つきで僕に紅茶……らしきものを差し出す。

つまり、彼と僕との談話の始まりだ。女性は彼の傍らに立っているが、どうせあのピアスが無ければ僕の世界の言葉はわかりはしない。

……さて、僕から話し始めるのも釈然としないので、とりあえず嫌らしくないように目の前の男と部屋を確認する。

過度な調度品はなく、立派な木製の机と本棚、僕の座るソファ二脚とその間の小テーブルが全て。

部屋の奥には大きな窓があつて、そこから都市が見渡せる。

風景の遠くに、連なる山脈……いや、小さいから峰か、がある。その峰に近づく太陽の尻尾。

この部屋は西向きか。つくづくこの男は、僕と会う時に逆光の中にいるな、嫌味か？

窓を背に、立派な木製の机に居を構えるバドルモア。

あれってマホガニー製の机なんじゃないか？この世界にマホガニーがあるのかは知らないけど。

「さっぱりしたようだね、セーヤ君。……ふむ。身なりが整えば、なかなかどうして結構美しい顔立ちじゃないか。」

まじまじと僕を見つめるバドルモア。

逆光だが、牢屋と違ってこの部屋は明るいから、その顔が良く見える。

年齢は——わからない。20代後半にも、30代にも、40代にも見えるが、若々しいことだけは共通している。

茶髪緑眼。

鮮やかに輝くブラウンの長髪はオールバックにまとめられて、ともすればいかつく見えそうなものを、柔和な笑顔が見事に中和している。

つまり、イケメンだった。お前は僕に、嫌味しかないのか。

バドルモアの顔立ちは……誰だろう……トム・クルーズが近いかな？
唯一つ、トム・クルーズと違うところは、その長身頑強な体格。
着ている衣服はおそらく軍装だろう。上から下まで濃紺で、上は詰襟のような服。

顔立ちに反比例する軍人の空気を纏った彼は、話す時に大げさな身振り手振りで感情表現してきて、街頭演説をする政治家みたいな奴だ。

政治家は政治家でも、軍部に属している方の。

演説中の場所は、多分バルチック艦隊を目前にした自軍の戦艦上だろうな。

「そういえば、その服はどうだい？ 丈は……合っていたようだね、よかったよ。」

入浴を終えた僕は脱衣所で用意された服を着ている。

黒一色のスラックス（に似たもの）、白のシャツ、そして革製の茶色いブーツ。

サイズが多少合っていないくてぶかぶかするけど、これはあれだ、人種の体格差のせいだな。

……つまりは僕が小柄なだけ。

しかし、この世界にきてから初めてまともな服を着た。

服の材質なんかは全くわからないけど、この肌触りは思ったほど悪くない。

僕がどれだけ汚れても、川で洗濯し過ぎてくたびれてもあのスウェットを手放さなかったのは、この世界でまともな服を手に入れられそうになかったからだ。

「……服と、あと歯ブラシ、ありがとうございます。」

「ハブラシ……？ああ、シボク歯木のことか？それなら気にしないでくれ。何の説明もないまま君を拉致したようなものだからね。」

そう、これも助かった。実はこの世界にきてから歯をきちんと磨けたことがなかったのだ。

当たり前の話だけど、化学繊維のブラシと歯磨き粉なんかがかっちりで手に入るはずもなく、川で生活していたときは水でゆすぐことしかできなかった。

ザルツ隊長達と一緒にいた時は、爪楊枝と瓜二つの鋭い木片で歯と歯の間を掃除したり、使い捨てらしい布切れで表面を拭くことができたが、21年間歯ブラシを使ってきた自分としては歯を磨いた気にならなかった。

ところが、ここには歯ブラシがあるではないか。とはいっても歯ブラシに似た「木のブラシ」だったが。歯木^{シボク}？お釈迦様で有名なアレか？

枝の先端が細かく裁断されていて、歯ブラシを木で作ってみたと言わんばかりのものだった。

「歯木^{シボク}は結構な贅沢品だからね。この都市のように、独自に歯木栽培をしている場所なら豊富に使用できるだろうけど。君の言っていたハブラシとやらは、君の世界で歯木の代わりに使うものなのかな？」

—— 少し、わかったことがある。

僕の元いた世界の名前の類は、いくら彼がピアス型の言語翻訳機を使っけていても通じないらしい。

言葉そのものに、名前の響きとしてしか意味がないからだろう。

だから僕の名前も「晴哉」ではなく「セーヤ」。

「歯ブラシ」が「ハブラシ」とアクセントのおかしい発音になっているのは、まだ「歯ブラシ」がこの世界に無い言葉の類だからか？あのピアスは意志疎通を円滑にするだけで、完璧に訳しているわけではなさそうだ。

これは僕の予想だけど、彼の言っていた「ギルド」だって、本当はこちらでは違う呼び名なのかもしれない。

彼自身も「ギルド」と言っただけでなく、こちらの固有名詞で「ギルドと同義」の単語を発したのではないか。

それを、あの喉のネックレスが理解しやすいように「変換」しているだけで。

お互い話に通じているようで、完璧には通じていない。そんな感じがする。

「そうですね…。今はそれより、聞かせてください。僕を拾った時の状況を。」

何故僕を拾ったのか。これが大前提。

銀髪の女は死んだのか、そして彼は女と関係あるのか。多分、彼は女を知っているだろう。

その想像だけで、口から漏れそうになる「爆^{バク}」の一字を飲み込んだ。

早合点は駄目だ。真相は、全てを知ってから。

ザルツ隊長達はどうなったのか、あの惨状を無視して僕を拾ったのか。

ただ、色々ありすぎてまとまらない。

「では、君も少し混乱しているようだし、私の話から。」

だからだろう、イニシアチブは相手に渡る。

「初めに断言しよう、君を攫おうとした女の名前はブランド。西領——ああ、つまりはこの世界のことだよ？ では、広く名の知れた暗殺者だ。」

ぎり…

拳が、軋む。

「そして、聡い君なら薄々勘付いていたんじゃないかな？ あの子を君の元へ差し向けたのは、この私だ。」

その一言が、僕の沸点を一瞬で超えさせた。

——が。

「……！！！！！！」

耐えろ。耐えろ。耐えろ。

噛み締めた唇から、血が出たのがわかる。
それを見て。

「——ふむ。」

満足そうに笑って、彼は言葉を続けた。

「ブランドはもう死んだよ。よっぽど激しい交戦だったみたいだね。君を守る者がいたのかな？　最初に言っただろう？　「異界人」と。君は、つまりは私が望んだからこの世界に連れてこられた存在だ。召喚魔術と呼ばれる方法でね。だから、突然この世界へ召喚された君を守る者など想定外だった。それで彼女一人を行かせたんだが……。まあいい。そうそう、召喚されたのが何故君かと問われても、私には答えられないな。正直な話、さしたる意味はない。ただ選ばれただけだ。無作為に。偶然に。故に、君はこの世界——西領へと召還された。」

僕の頭には、彼が言わんとしている何割が入っているだろうか。

……ああ、もどかしい。

仇の片割れが、ここにいる。

「もう一つ想定外だったのは、君がラフェルドナス——覚えがあるだろう？　森だよ、大森林地帯だ。そこで、ある男と出会えなかったことだ。紅い髪の男と出会わなかったかい？　会っていたら、そもそもブランドを差し向けなどしなかったんだよ。件の紅髪の男は目下、行方不明中なんだ。全くどこへ行ったやら……。死んでいる……はずはないんだけど。」

そう言って、彼はもう一度僕を見る。

怒りを堪える僕に、何を感じたやら――

「……やっぱり、衝撃がきつすぎたかな。これじゃあ駄目だ。――
――アーニヤ。」

「g i u t s z g。」

彼の傍らに控えていた金髪の女の姿が消失する。

馬鹿な！

「m k p i y x e。」

そして背後から聞こえてくる、女の声。
首に感じる鈍い衝撃。

――くそつたれ。
弱いなあ、自分。

憎い仇を前にして、僕は意識を失った。
ただ、意識を失う直前に聞いた、彼の一言だけは覚えている。

「大人しく聞いてくれてありがとう。」

ふざけるな。

お前は絶対、殺してやる。

3話 執務室にて（後書き）

ストーリーが破綻しているような、そんな文章になってしまいました。

なるべく超展開にならないよう努力します。

晴哉がひどく喧嘩っ早いですが、それは「異世界」に順応し始めた為です。

あと、自分に何かしらの”力”があると知ったためでもあります。

4話 世界の意味

「少し、お遊びが過ぎると思われませんが…。」

失神させた晴哉を、部下に運ばせた後の執務室。

アーニヤはバドルモアに対して苦言を呈する。

もちろん、先刻の晴哉に対する彼の態度だ。

晴哉は気付いてはいなかったが、アーニヤもバドルモアと同じ、言語変換の働きを持つピアスを身に付けている。

彼女の豊かな金髪に隠れて見えなかっただけで、アーニヤは先程の会話を全て理解していた。

その上で、彼女なりに思う所があった。

「ごめんごめん。私としたことが、念願の代物を手中に収められたから、年甲斐もなく興奮してしまったようだ。」

悪びれることもなくバドルモアは言う。

「……それにしても。異界人の彼からしたら、先の会話の内容は到底――」

「信じられるわけもないだろうね。私が彼の仇だということは痛い位に理解できたみたいだけど。」

心底嬉しそうに笑うバドルモアを見て、余計にアーニヤは納得できなくなる。

バドルモア——西領に君臨する闇の暴力の象徴・暗殺者ギルドの首領。

召喚術を利用して晴哉をこの世界に呼び出し、彼を利用して再びの世界大戦を目論む狂者。

その計画を知る者は、ブランデ・パズを代表とする暗殺者ギルドの実力者数名、秘書であるアーニヤ、そして晴哉の召喚を成功させた異端の魔術師・ロイハルトのみ。

晴哉は、この世界を何も理解していない異邦人。

ならば、もつと穏便に彼を利用すればいいではないか。

わざわざ彼の敵になる必要はないのではないか。

何も知らない赤子に、拭い消せないトラウマを抱かせて、露程もメリットはないのに。

「賢くないと思うよ、私自身。」

暗殺者とは、人の思考の機微を読むに長ける。

アーニヤの抱く不可解さを、空気で感じたのだろう。

バドルモアは彼女に自身の考えを語り始めた。

「さっきの会話なんて、会話以前の問題だろうね。愚かな進め方をした。それは、私が一番理解している。」

「では何故？」

あえて、あのように意味不明なやり取りをしたのか。
バドルモアの表情から、柔和な笑みが消える。

「世界に対して有害な計画」は、本当に成就すると思うか？」

質問の答になっていない一言。

だがアーニャは知っている。

一見答に聞こえずとも、彼は先に「答の核心」を口にする男だ。

「歴史を振り返ればいい。——例えば、圧倒的な力を有しながら、緻密で完璧な作戦と戦略を用意しながら、西領統一という計画の成就にあと一步の所で頓挫したエヴァルド帝国なんかはどうだ。何故、10年前の大戦で彼の帝国は失墜し、王国に成り下がった？」

彼は問う。

「中立国であったエス・レス・カーンに侵攻した愚断かと。五賢者の一人・リヴァルスを筆頭に、エス・レス・カーンの魔術師隊は世界最強。踏まなくともよかった虎の尾を、あえて踏んだ帝国側の傲慢さの結果では？」

彼女は返す。

「そうだね。帝国は西領統一に執着した。あそこで自軍の軍事力を慢心し、賢者の国へ侵攻しなければ、少なくともエス・レス・カーンを除く西領の他国全てを併呑できただろうに。」

——だが。

彼は言葉を切る。

「再び歴史を振り返ろう。10年前のエヴァルド帝国はもとより、100年前のアンゼルド皇国。140年前のオーブランド王国。200年以上前のホーデン・ヴァーグ帝国。全て、この西領全土を統一するに不足無い大国達。しかし、長い歴史の中で、この西領全土を統一できた国は一つとして存在しない。どの大国も、統一戦争の最終局面で頓挫した。後世に名も伝わらぬ英雄の活躍や、小国の思わぬ抵抗や足掻き、内部分裂、そして理由は違えどその本質は同じ。」戦乱が長引きそうな選択をした結果”西領統一の計画は成就しなかったという事実。”

アーニヤは、口を挟まない。

彼の言葉を、その言葉の裏に込められた何かを、聞き漏らさぬ様に。

「私の勝手な考えだがね。”世界”には”意思”が存在していると思うんだ。中々浪漫溢れる考えだろう？大抵の人間は、運命や宿命なんてものは「神の意思」とほざくが私はそうは思わない。神は

天上におわすと言う。ならば、地上のいざこざになぜ口をはさむ。神が真の全能者ならば、そもそも初めから争つてばかりの人間を創造するものか。」

「……”意思”を持つ方は「神」でなく、我々人間の争いで直接的に不利益を被る側——つまり”世界”だと？」

「その通り。確かに歴史上、数多くの大国の計画を喰い止めて来たのは人間の力、人間の意思だ。だがしかし。計画とは、隠されて秘密裏に進んで然るべき。何故外部へ漏れる？ 何故その情報が、偶然にも英雄成りえる人物や国に届く？ そして戦乱を長引かせる愚かな選択をした大国は、ことごとく計画の裏をかかれて、あるいは逆に利用されて、史実に敗者として遺される——」

「世界が、その計画の成就を望まぬからですか？」

「そうだろうね。世界だって、戦争を長引かせない選択をする者には追い風を吹かせるだろうに。——まあ、私の計画はどう考えても世界に害悪なものだからね。計画を頓挫させる為に、世界の意味は抵抗してくるだろう。ならば最低限の計画を除いて、あえて無計画に遊ぶことにしたよ。彼を個人的に利用する計画は放棄し、彼個人の動きを利用して世界大戦に持ち込んでやるさ。」

溜息で一端この話を止め、バドルモアは椅子から立ちあがる。その手には、一枚の紙切れ。

「見たまえ。世界が意思を持つ証明だ。」

アーニヤに渡されたそれは、数日前、ザルツによってエス・レス・カーンに送られたはずの機密書類。

晴哉の重要性和西領への危険な影響を警告する文書。

そしてこれを奪ったのは他でもない、アーニヤ自身だった。

奪った当初は、運悪く計画が露呈しそうになった事に冷や汗が出たが――

「……確かに。今の話しをふまえて見ると、正直私も鳥肌が立ちます。」

今度は、人知の及ばぬものに対する恐れから鳥肌が立つ。

「私もだよ、アーニヤ。余裕ぶつた言葉や態度でいるけどね、やはり私も大戦を起こす計画が頓挫するのは避けたい。――計画はあくまで計画。予想が外れることも想定してこそ、だ。だがラフェルドナスに召喚されることは想定済みだったのに、ロイハルトが行方知れずなど想定外だった。あそこでロイハルトが晴哉を回収できていれば、こんな風に賢者の国と晴哉を接触させる事態も起こらなかった。……とはいっても、この機密書類を奪えたことで未遂に防げたがね。」

君のおかげだ。そう言ってバドルモアは微かに微笑む。

ありがとうございます。アーニヤは礼を述べると、機密書類を彼に返した。

彼の口から漏れる僅かな詠唱。そして、彼の手から書類へと鮮やか

な炎が走る。

機密文書は、祖国へその情報をもたらさぬままに灰へと変わった。

件の召喚魔術を行った紅髪の男・ロイハルトは、暗殺者ギルドの構成員50名が全力で行方を搜索している。

が、未だにこれという手掛かりは見つかっていない。

晴哉を召喚する為、最も召喚できる可能性の高かったラフェルドナスへと一人で赴いた彼をこの1ヶ月弱に見た者はいなかった。完全に、いなかった。

ロイハルトの、目立ち過ぎる紅色の髪がその役目を果たしていないのは、世界側からの意趣返しだろうか。皮肉なものだ。

しかし、世界には意思があるという前提。

バドルモアの考えに、言葉に、アーニヤは肯定も否定もできない。ただ、思うしかない。

このバドルモアという男は、狂っている。

計画を立て、その計画を放棄するという矛盾した態度で、しかし最後には望みを成就させるつもりなのだから。

それでも、何だろう？

狂った彼に、全く嫌悪感も猜疑心も抱かない。

逆に彼女は、自分の身体の奥底から湧き立つ快樂とも快感とも言える昂りを自覚していた。

そしてそれが、バドルモアへの忠誠だと改めて気付くのにそう時間はかからなかった。

「先の見えないのは私も同じだぞ？　世界の意味も、これでは対処の取り様がないだろうな。」

バドルモアは再びその顔に柔和な笑みを浮かべ、窓の外の峰に沈んでいく太陽を見つめる。

「……とはいえ、さすがに最初の予想は当たるだろうね。」

彼は確信している。

アーニヤに命令してバドルモアが暗戔を強制的に黙らせた理由は、ザルツ達の仇討ちで凝り固まった彼に魅力を感じなかったことと、黙らせた後に目覚めた彼がどんな行動にでるかが楽しみだったこと。ただ1度頭を冷やしてやれば、聡い彼のことだ。

「これ」を奪いに来るはずだ――

硬質的な音を立てて、バドルモアは首から下げたネックレスを弄ぶ。

古代帝国研究者のロイハルトが見つけた『古代帝国期の遺産』。大いなる古代のアーティファクト。

それが、彼とアーニヤの持つピアスとネックレスの正体。

これらが見つかったから、彼は計画したのだ。

再びの、世界を巻き込む大戦を。
異界人を召喚させる、尊大な計画を。

4話 世界の意思（後書き）

超展開、申し訳ありません。言い訳はしません。
出来る限りの修正をした結果が今作ですから…

5話 恩義（前書き）

更新が遅れてしまい、誠に申し訳ありません。
自分のPCが逝去しました……orz

今はネカフェから更新しております。
本当に、申し訳ないです……orz

5話 恩義

自分は、極平凡な大学生だ。

性格は日本人のステレオタイプ。

日常といえば、朝目覚めて大学に通い、好きな歴史学を学び、本格的に迫る就活に戦々恐々とし、夕方帰宅してからすぐにバイトに行つて生活費を稼いで、深夜に眠る。

夢を見ていた。

いつもの、当たり前前の、ずっとは続かなくとも、しばらくは続くであろう大学生活の日々の夢。

そして田舎の夢。

実家に健在な、両親と祖父母。弟と妹。

帰る度が変わっていく故郷の風景と、変わらない家族の暖かさ。

どこで変わってしまったのだろう。

夢の中だというのに、意識があつた。明晰夢というやつだろうか。訳も分からずにこの世界に引っ張り込まれてからこれまで、薄情なことに。

郷愁とやらの苛まれた日は無かつた。

漠然と「いつか帰れるだろう」という思いがあつたからだ。

ああ、頭が痛い。

このまま、ずっと夢の中にいたい。

目覚めたら、僕は変わってしまふ。

わかってしまふ。

何かしらの力が自分にあると知った。

だから、我を通すために他人を傷付け、殺すことさえ躊躇わなくなる自分になるという確信。

それがわかった。わかっていた。

——でも、変わらざるをえないんだろうな。

日本人のステレオタイプな僕には譲れないものがある。

「受けた恩は、必ず返す。」

それだけは守りたい。

それだけは貫きたい。

訳も分からずに引つ張り込まれた世界で、偶然にせよ、どんな意図があつたにせよ、暖かく手を指し伸べてくれた人達がいた。

その人達を助けられなかった僕がいた。

今まで郷愁を抱かずに済んだ理由は、生き延びるのに必死だったことと、ザルツ隊長達が傍にいてくれたからだ。

忘れるな。

彼等の存在が、自分にとってどれだけ救いになったかを。

忘れるな。

皆のおかげで、僕はこうしてむざむざ森で死なずに済んだことを。

忘れるな。

見ず知らずの僕の為に、絶望的な状況でも立ち向かってくれた人の、
貴さを。

目覚めろ。

自分への決着を付けに行く為に。

——意識が、覚醒していく——

光源の乏しい夜の執務室。

窓の外には、寝静まる都市と、天頂から傾き始めた月が見える。
揺らめく蠟燭の明かりを前に、椅子に腰掛けたバドルモアは思案に
耽る。

”世界の意味”

昼間、アーニヤに話した自身の考える仮想敵。

—— やってくれる。

それが、世界に害悪をもたらそうと画策する自分に、“今”という
絶妙なタイミングで「予想通り」に「予想外」な情報をもたらして
くれた。

夜の帳が降りる頃に、各地に散らばっている部下の一人からギルド
に届いた書簡。

彼の手に握られたそれには、晴哉の召喚に成功した魔術師・ロイハ
ルトが、なんとバドルモアを裏切りエス・レス・カーンに亡命した
と伝えているではないか。

……確かに、気まぐれで身勝手な男ではあった。
バドルモアの持ち掛けた計画に乗ってくれたのも、更なる古代帝国
期の魔術の発展の為。

それ以外は知的好奇心。

異界、つまりはパラレルワールドから天文学的な確率で、古代帝国文字を習得した人間を無作為に召喚できるか否かを「確かめたかっただけ」。

結果として召喚には成功したが、その後のロイハルトにいかなる事情があつたのか知る由もない。

唯一わかつていいる事実は、ロイハルトはバドルモア達暗殺者ギルドを裏切つてエス・レス・カーン側についたということ。

……自身の描く計画は、既に露呈してしまつたか……。

——今日という日を、バドルモアは忘れられそうにない。
かつての大戦時並に、密度の濃い一日だ。

「……久しぶりだよ、こんなに先が見えない状況は。」

思わず笑みを浮かべ、独り言を言つてしまふくらいに。

だが。

暗い室内に、僅かに一人分の質量が紛れ込んだ気配がした。

扉はもちろん開いていない。

バドルモアの笑みが深まる。

この予想だけは見通せていたからだ。

「^{ザン}斬！」

何もいない空間から発せられた声。

「^{ヘキ}壁！」

刹那、バドルモアが叫ぶ。

ギン！！

机の前の空気が固体化し、不可視の刃を喰い止めた。

あと一秒の遅れが、バドルモアを肉片に変えていただろう。

椅子を蹴り上げるようにして、しかし無音のままに後ろに跳び下がる。

「《疾く姿を現せ》！」

バドルモアの双眸が文字通り光り、前方の空間に当たる。

バチッ！！

漏電した様な音を立て、何もなかった空間が陽炎の如く歪んだ。
透明な大気の中から、次第に色彩を帯びた影へ。

——その影が、黒のスラックスと白のシャツを着た青年に変貌
するのに、大した時間はかからなかった。

「……挨拶が過ぎるんじゃないか？ 晴哉。」

笑みが止まらない。

吊り上がる口角を止められない。

久しぶりなのは、これもだった。

いつぶりだ？

自分が直に、戦うのは。

5話 恩義（後書き）

いつの間にかPV30、000超、ユニーク4、000超です、お気に入り登録100件超です！

嬉し過ぎて小説情報を二度見してしまいました。

ありがとうございます。そして、更新が滞ってしまい申し訳ありませんでした。

6話 覚悟

ずきりと響く首筋の痛み。
両手の違和感。
湿った黴臭さ。

……あの地下牢か。

またここで目を覚ます憂鬱さに、まどろむ意識が一気に覚醒する。
覚えているのは、執務室でバドルモアを前に、失神させられたこと。
身体の節々が痛む中、頭の中だけは妙に冴えていた。

「大人しく聞いてくれてありがとう。」

奴は、そう言った……。

心に、身体に、熱が溜まって行く。
両腕は、今も拘束されたままだ。

——思い出せ。

夜の平原で成功した時の様に、イメージを働かせろ。
今『爆^{バク}』をしたら、自分まで吹き飛びそうだ。

——なら

「^{カイ}解。」

——ガチッ

両手を拘束していた鉄製の手錠が、音を立てて外れる。

……いい感じ。

起き上がると、節々の関節が小気味良い音を立てる。

どれくらい気を失っていたのかはわからないけど、そんなことは後回しだ。

目指すのは、この洋館2階執務室。

目的は決まっている。

銀髪の女が死んだらしい今は、あの男を殺して仇を討つ。

オルスが、ザルツ隊長達が喜ばないかもしれない。

だけど決着はつけておきたいのだ。

「受けた恩は、必ず返すよ皆。」

言葉も通じない異界人の自分を助けてくれた、この世界の騎士達の

為に。

皆が助けてくれた自分という存在を、奴に——バドルモアに知らしめる為に。

ゆらゆらと揺らめく蠟燭の明かり。

かすむ視界には、額の汗を拭う若い男の姿が写る。

「——ふう。これで、まあ、一通りは終わったな……。」

パズの声で、自分が知らない間に眠っていたことに気付く。

目を向ければ、視界の左側に眩く輝く光の固形物——つまりは私の左腕なんだけれど——があった。

「……佳境は、超えた？」

寝惚け眼で少し上ずった声でパズに話し掛ければ、驚いた風にこちらを向く。

「起きたのか？」

「…まあ、ね。正直、寝たきりで身体が痛いし。」

身動きの取れない窮屈さで自然と眠りも浅くなる。

散漫な眠りを繰り返すと、やはり回復より疲労の方が溜まるのだ。でも、それはパズに比べればどうってことはない。

私の治療に掛かりきりの彼の方が疲れているに決まってる。

「粗方終わったぞ。神経系の縫合には手古摺ったが、すぐにでもお前の魔力と上手く結び付くはずだ。後遺症が出ないことは保障する。」

「いつもながら、凄い自信よね。もし後遺症が出たらどうする？」

「奇跡級の魔法師って称号を下ろさせてもらおうかね。…あとは、お前の奴隷にでもなろうか？」

「冗談でしょう？ パスよ、パス。」

右手で追い払うような仕種をすれば、パズは全然残念そうじゃない口調で「残念だなー。」とうなだれた。

そんな他愛ないふざけた会話を交わしながらも、彼はしっかりとこれからの左腕の経過を説明する。

治療中に飲んだ魔力回復薬と十分な睡眠で、私の魔力保有率はほぼ

全快した。

よって、彼の魔力で形成されたこの左腕と、私自身の魔力が結び付くのはすぐだそうだ。

今回私が一度魔力を放出し切り、その影響で超回復も起こっているので、当初の目算よりも早くこの左腕は完治するらしい。

「三日三晩じゃなくなりそうでよかったー。主に俺が。」とぼやく彼を笑って流し窓の外を見れば、すっかり夜中を回っていた。

ギルド内がひっそりと静まり返っているのも感じる。

光源が乏しい夜の室内だが、治療中の左腕が発する魔力光で大分は明るい。

軽い運動や動作——日常生活レベルでさえ左腕を使用するのは絶対に禁止なので、意識して左腕を使わないように身を起こす。左腕を動かさず、宙ぶらりんのままなら動いてもいいと言われたが、これはしんどいな…。

今までの暗殺者家業の中、ここまでの部位破壊をされたことが無いので、不便さに眉を曲げてしまった。

パキパキと小気味良い音が全身から響き、寝汗で張り付いた肌着の気持ち悪さが鬱陶しい。

「——さすがにお風呂も…。」

「駄目だな。完治をかなぐり捨てて後遺症を歓迎するなら許可するがね。」

「——それも、パス。」

仕方ない、拭いて清めるか。

女性の魔法師を寄越すようにパズに頼めば「俺がやるさ。」と予想通りに言ってきたので蹴っておいた。

本当、この癖を治した方がいい。
なるべく早急に。今すぐになでも。

——ギン

「…?!」

「……なんだ？」

遠くから、何か、聞き覚えのある硬質な音がしたような…。

肌がざわめく。

暗殺者として培ってきたキャリアが、何かを告げている。

「…パズ、ちょっと出てくる。」

「あ？ でももうすぐレイテが桶持って来るぞ？」

「花を摘みに行くだけよ。」

「それは…失礼しました。」

治療室から出た私の背中からは、「絶対に左腕を使うなよ。」と言うパズの声がかけられる。

——でも。

ごめん、パズ。

私の予感では、厄介なことになりそう。

意識するのは、この洋館2階の執務室。

イメージを働かせて、部屋の位置を思い出し、発動しそうな言葉を選ぶ。

「……^{テンイ}転移。」

顔面に、いや、口内か？ に感じる、体温とは別の熱さ。

身体から何かが抜けるような、微かな脱力感。

僅かに身体が浮き、しかし急に萎んだような感覚の後、僕の身体は

地に足着いてしまった。

——失敗か？

どうやら、いきなりレポートするのは難しいらしい。
でも、失敗したけど絶対出来ない訳ではなさそうだ。
遠距離は無理でも、近距離ならどうだ？

牢屋の鉄格子の向こう側を凝視して、再度言葉を紡ぐ。

「^{テンイ}転移。」

また湧き上がった口内の熱と共に、僕の身体が宙に浮いて——

「うわ?!」

本当に、瞬きの間の出来事のように、気付けば僕の身体は鉄格子の外に抜け出せていた。
成功だ。

近距離限定で、これは使える！

ただ、成功したからなのか身体がだるい。
筋肉痛の様な鈍い疲労感がある。

ゲームと同じか。自分の体力がMPだろう。

——この力を乱用すれば、死ぬ。

一個一個試していけないといけないんだろうけど、そんな暇はない。とにかくここから脱出したい。

このギルドの本部とか言う洋館から。

この洋館のあるレグオンと言う都市から。

バドルモアを倒……殺して、あの言語変換機能の付いたアクセサリを奪えば、この世界でも言葉が通じる。

意思疎通さえ出来れば、この世界でも生きていける。

例えどんな形であれ。

バドルモアは言っていた。

僕——と言うより、恐らくは漢字を知る者——を利用する

為に、この世界に召喚したのだと。

何の目的の為にどう利用するかまではわからない。

ただ、決してこの世界に良い目的ではないことは分かる。

なら、抗わなくては。

もう知る由もないけど、ザルツ隊長やオルスは、僕の知る漢字の知識の危なさを理解していたから、僕を保護してくれたんじゃないかな。うか。

……そう思うと、やっぱりバドルモアの持つアクセサリは必須だ。意思疎通ができていたら、彼等を助けられずとも、死なせずに済んでいたかもしれないのに……。

——さあ、行くぞ。

空腹であり回らない頭を働かせて、執務室までの潜入方法、そしてバドルモアを殺す方法を考える。
看守がいらないとはいえ、もう牢屋からは出てしまっているから、姿を隠さないと……。

…。

……。

……ん？ 隠す？

これだ！！

「——隠^{イン}！」

言葉を発するや否や、どんどん透けていく身体。

凄い！

何だこれ？！

完全に透明になった（と思う）僕は、執務室へ向かう。

あの銀髪の女——ブランドとか言ったか？ を差し向けるような奴だ。

同じような奴が、この洋館内にいることも想定しておこう。

夜中とはいえ、向かう途中であんな狂った様な殺人者と鉢合わせしそうな気がするし。

けど、少なくともこの「隠^{イン}」で透明になっているから姿を見せずに行けるだろう。

バドルモアが執務室にいないければ、手当たり次第に探すしかないが、

部屋の中へはさっきの「転移^{テンイ}」で入り込めばいい。
極力足音を立てない様にして、僕は洋館の2階へと向かった。

7話 ギルド脱出（前編）

「……挨拶が過ぎるんじゃないか、晴哉？」

深夜の暗殺者ギルド本部、執務室。

部屋の主でありこの暗殺者ギルドの首領・バドルモア。

晴哉の頬に、汗が一筋伝った。

奇襲は失敗した。

夜更けであり、さすがにバドルモアも昼間の如く執務室に籠りつ放しとは思ってはいなかった。

しかし、晴哉にとって、この屋敷で唯一用途の判明している部屋がここしかなかったのだ。

運悪くか運良くかは別として、最初に踏み入れたこの部屋で、バドルモアとエンカウントしてしまった。

奇襲は失敗したが、打つ手は無数に有る。

確かに晴哉は焦っていた。だが、冷静さを無くしてはいなかった。

自身の持つ力、心の中で思い浮かべた漢字の意味を具現化させる魔法。

正直言えば、晴哉はバドルモアのピアスもネックレスもこの魔法を前にすれば……と思った。

思い浮かべればいい。

ただ念じればいい。

そうすれば、物理法則も何も無視した結果を引き起こせる。

そのことはもう既に気付いている。

極端な話、バドルモアに「死」「殺」を意味する言葉を用いれば、それでこの戦闘は終了なのだ。

奇襲時にも、「斬」など使わず其方を使えば良かったと思っている。

だが――

先の牢屋で鉄格子を通り抜けた時、身体に感じた疲労。

そして、夜の草原では気付かなかったが、奇襲時の「斬」を使った後も僅かにそれを感じた。

これは全くの晴哉の勘である。

等価交換、質量保存の法則、かつて学校で習った理系科目に登場した数多の内容。

ゲームでも漫画でも小説でもそうだ。

魔法とは、代価無しに扱える代物であろうはずがない。

自身が感じた疲労感は、因る所がフィジカルであれメンタルであれ、体力を消費したからに違いない。

考えてみれば、よくあるファンタジー物にHPとMPが分けられている方がおかしいのではないだろうか。

魔法は超常現象の類であつた。

少なくとも、晴哉の元いた世界では。

だが、どうやらこちらの世界では、あくまで”何等かの法則に則つ

た”一般的な現象ではあるようである。

あの銀髪の女が使っていた魔法然り、今自分の奇襲を防いだバドルモア然り。

それに、晴哉が狙う、あの言語変換機能を持つアクセサリ。

一見何の変哲もない小さな金属細工なのに、そのような高度な処理を施せるというのは俄かには信じ難い。

この世界の文明の発達具合は、どう見積もっても中世ヨーロッパだろう。

大航海時代に突入する直前か、その前後ほど。

元の世界の通り発展するとしたら、超小型精密機器の登場など4、500年も先の話だ。

オーパーツにも程がある。というか、元の世界でもあんな小さな言語変換機など存在していない。

ならば、やはりあのアクセサリも、何らかの魔法かそれに近い現象が付与されていると見ていいはずだ。

漢字の魔法を用いれば、この屋敷から容易に抜け出せるだろう。通じない言語も、如何様にもなるだろう。

だが、初めて使った魔法のMPが、自身の最大値を超えていたら？

”運良く”超えずとも、半分以上消費してしまったら？

そもそも、自分の最大値はどれほどののか？

何より、MPはどれくらいの周期で何割ずつ回復するのか？

漢字一文字と複数文字では、どれほどの差異がある？

魔法の効果は一時的か永続的か？

もしかしたら、アクセサリを使わずに逃亡した方が、最善手であつたかもしれない。

ここでバドルモアと事を構えず、彼の思惑に操られたままの方が、賢かったかもしれない。

たら、れば。

たら、れば。

たら、れば。たら、れば。たら、れば。たら、れば。

たらればたらればたらればたらればたらればたられば
たらればたらればたらればたらればたらればたられば
たらればたらればたらればたらればたらればたられば
たらればたらればたらればたらればたらればたられば

——効率を重視すれば重視するほど、自分の回転の速くない頭が失速していく。

なら、もう最初に決めてしまおう。

そう晴哉は思っていた。

何故アクセサリーを奪うのか？

言語変換を、魔法で補うより便利だからだ。

何故魔法を、漢字を出し惜しみするのか？

この力の詳細が判明するまでは、極力使った事のない魔法を使うのが怖いからだ。

何故この屋敷から、バドルモアからすぐに逃げ出さなかったのか？

もちろん、バドルモアが身に付けるアクセサリーの回収の為に。

——でも、それ以上に。

（まさか、本当に私のもとにやって来るとはね。暗殺者の、それも首領の私にだ…。）

バドルモアの柔和な笑みが、かすかに歪む。

狂笑。

だからこそ、異界人は面白い。

常人を超えた身体能力と戦闘技術。

暗殺者が恐れられているのは、一重にその為だ。

晴哉は、恐らく、戦争や魔術・魔法とは無縁の世界からやって来たのだろうと、バドルモアは思っていた。

そんな、彼からしてみれば尻の青いひよっこところでは済まない青年が、古代言語の魔術を用いるとはいえ、奇襲してきたのだ。

なんと愚かで、なんと愛おしく、なんと聡いのだろう。

愚者とは何ぞや？

それは、重要な局面で辛くも賢者を打破する者。

無謀など、吐き捨てるほどにこの世界に満ち溢れている。

その無謀を声高に語る賢者が、どうして無謀を信じない愚者に勝てようか。

故に。

今、こうして、闇の武力の首領に立ち向かう道を躊躇わず選んだ晴哉は、”このバドルモアの敵足りうる”者だ。

聞かずにはられない。

恐れず私と、強者と戦うことを選んだ弱者に、何故その手段を選んだか。

「何故逃げ出さなかった？ このピアスとネックレスの為だろうか…。君の持つ力に”気付けた”なら、こんな物に頼らずともいいはずだろう？」

何故だ？

「君の千載一遇の脱出の機会をふいにしてまで、何故私に奇襲をしかけてきた？」

もうバドルモアに奇襲は通用しない。

正面衝突を覚悟する。

飲み込まれてしまいそうになる彼の笑顔に、晴哉は覚悟を決めて一歩、前へと踏み出す。

濡いた唇を、掠れた喉を震わせて、吐きだす。

何故、自分は、逃げ出さずにあえてバドルモアのもとへとやって来た？

「…… 1ヶ月も、一緒に、いなかった。短い、凄い短い時間だった。」

身元も不明で、言葉も通じず、身なりも汚ない、そんな自分を。

訳の分からない世界にいきなり放り込まれた自分を、どんな思惑があつたにせよ、暖かく迎え入れてくれた。

そんな彼等を襲い、皆殺しにした仇の、仇のさらに黒幕を前に、逃げ出す腑抜けになどなりたくない。

「彼等を、彼等からの恩義に、応える。」

念じる。

今まで使用した漢字を確認する。

「恩人をむざむざ目の前で殺されて、その仇の黒幕がここにいる。ザルツ隊長は、オルスは、僕を守るように戦った。なら僕も戦う。彼等の仇を取らせてもらう。彼等がそれを、望んでいなくとも。」

「……それは、つまりは君のエゴかい？」

「——そう”だよ”くそつたれ！」

感情が高ぶると、懐かしい感覚が全身に走った。

夜の草原で、銀髪の女と対峙したあの時と同じだ。

口内から、猛烈な熱が走って、首を、上半身を、下半身まで。

だけど今回は、闇雲に魔法を使う訳にはいかない。

その為に考えた方法が、晴哉にはあった。

バドルモアの瞳には、晴哉が、眩いばかりの光の奔流に包まれている姿が幻視できた。

もちろん本当に発光しているわけではないが、そう錯覚してしまえるほどに、彼の、晴哉の魔力の奔流は力強い。

異界人は魔力を扱えない。

扱えたとして、いきなり魔力を、魔術・魔法を発せるなど、前例が無かった。

それが通例だった。

報告では、ブランデが晴哉捕捉の際に顔面を殴り、口内を切ったとあったが。

（謎だ。セーヤが特別な異界人なのか、それとも他の要因の為か…。少なくとも、ブランデの顔面への攻撃で、セーヤが魔術を扱えるようになったってしまったのは確かだけだね…。）

なんにせよ、今する事は一つ。

こんなにも楽しい玩具を前に、遊ばない道理は無い。

先手を取ったのは晴哉だった。

この執務室まで向かう間に、乏しい現在情報を自己分析し、如何にしてバドルモアに対峙するかを考えていた。

昼間に交わした会話内容から、銀髪の女は暗殺者だった。

そしてバドルモアが女を差し向けたと言っていたこと、このギルドの首領と言っていた事、執務室までの道程で見かけた者達の外見から、ここは暗殺者が傭兵を纏めるギルド。

バドルモア自身も暗殺者か傭兵だろう。

奇襲で放った「斬」^{ザン}を防いだのは「壁」^{ヘキ}だったことから、あの女と同様（自分とも同様）漢字を利用した魔法が使える。戦闘のプロであることは間違いない。

対して自分は、21年間喧嘩も格闘技も学んでこなかった平平凡凡な大学生。

分が悪いとか、勝ち目がないとか、そんな次元ではない。

攻撃手段の魔法も、「斬」^{ザン}、「爆」^{バク}くらいだ。

「爆破」^{バクハ}は使った後に気絶したから、ここでは使えない。というより、アクセサリーごと破壊してしまう可能性がある。

選択肢が少なすぎて、作戦さえ練るのが困難だ。

思い浮かんだのは、幼少時代に見ていた戦隊物の番組と仮面ライダーだった。

一般人（一応外見は）が変身する事によって、人間より強力な怪物に立ち向かえる力を得る。

とはいえ、自身を変身させる魔法（漢字）などいくら考えても思いつかない。「変身」^{ヘンシン}と叫んで姿が変わるのか？

だから変身は度外視し、純粋に自分の身体能力を上昇させる方法を考える。

攻撃というより補助魔法の類だろうから、気絶はしないはずだ。
持続時間がわからないのがあってギャンブル要素が強いが、戦いの
素人が玄人に勝つには短期決戦しかない。
中国の兵法を借りれば、「兵は神速を尊ぶ」だったか？

(……いくぞ！)

浅く息を吐く。

呼吸を整えて、漢字を頭に思い浮かべる。

——頼む。成功してくれ……。

「ニクタイキョウカ
肉体強化！」

自分の力を、漢字を信じて叫ぶ。

魔術・魔法を知らない晴哉が知る由もないが、彼は今まで自分の魔
力を外へ放出するものしか使用していなかった。
だが今回は、自身の魔力を身体に付与するものだ。
瞬間、身体が強いアルコールを摂取した時のような熱さに包まれた
と感じた後に、体重が全くなかったような浮遊感が襲った。
それほどに自分の身体が軽かった。

自分の行使した魔法に驚いている暇などない。
軸足に力を込める。

バドルモアとの距離は大体十数歩程。
軽すぎる身体にバランス感覚が狂いそうになるが、一気に距離を詰める為に踏み込んだ。

——そして、空間が縮まった。

驚愕したのはバドルモアも変わらない。

ピアスの機能から、晴哉が自身の身体能力を向上させる魔術を行使したのは確かだった。

生憎「ニクタイキョウカ」と音は聞き取れても、漢字の字体が分からないので彼には使えないが。

もう目の前まで晴哉は来ている。

単純な速度だけで見れば、超一流の暗殺者並みだ。

晴哉の手が、バドルモアの右耳のピアスに伸びる。

バドルモアの動体視力だからこそ見えた、その高速の貫手と違うな
い一撃が、過たずにピアスを掴み取った。

微かな痛み。

強引に引き千切られた右耳の痛みだろう。

と、腹部に別の感触があった。

（——晴哉の、右手?!）

古い空手の技に「山突き」と呼ばれる一手がある。

両手で突くというだけの単純な技だが、児戯と呼ぶには一線を画した、実戦向きに完成された技だ。

人間は通常、先に飛んできた拳に意識を傾け防御する。

では、その防御の意識圏外に「全く同じ突き」が飛ばされてきたらどうか。

いかにバドルモアが超一流の暗殺者といえど、戦いの素人の晴哉相手に、戦時下並みの集中力を抱かせることはできなかった。

晴哉は空手を習ったことはなかった。

だが、日本が世界に誇るサブカルチャーにおいて、いわゆる格闘を題材とした作品は腐るほど存在する。

高校時代に読んでいた漫画の内容がこんな場面で活用できるとは、本当、この世界に無駄なものはないという言葉は正鵠を得ている…。

バドルモアの腹部に添えられた晴哉の右手は、左手とは違い速度も威力も無いものだった。

ならば、狙いは一つだ。

ぞわり。

忘れかけていた感覚が、バドルモアの身体に蘇る。

それが死への恐怖、生存本能というものだと思い付いた時、彼の耳に聞こえたのは晴哉の声。

「……斬^{ザン}。」

細い縄が腹部を掠めた様な感触。

その後に、強烈な熱。

胸を、喉を競り上がって来る吐き気。

ごぼり。

どす黒い血が、口内から垂れ落ちた。

地面から、重力から解き放たれた感覚と目前に迫る執務室の絨毯を目に、バドルモアの意識は途切れた。

7話 ギルド脱出（後編）

どうしても動かしてしまいそうになる左腕を、極力意識して動かさないようにして、真っ暗闇なギルド本部内を移動する。

初めから隻腕だと思い込まなければ、パズによって施された治療が無駄になってしまいそうだった。

魔力で形成された淡く発光する仮初の左腕は、一見完治しているように見える。

けどそれは、パズが人並み外れた魔法師だという証だ。

根元から爆ぜ飛んだ部位を、一昼夜でここまで復元できる方がおかしい。

「奇跡級」の称号に違わない彼の医療技術に、素直に感謝の念を覚える。

今はまだ、これはあくまで仮初の左腕。

使用は絶対禁止。

その言いつけを破って使ってしまったえば最後、「レグオンの100人殺し」だった私には二度と戻れなくなる。

純粹に戦闘を、人を殺すのを生業としているのなら、隻腕では駄目なのだ。

だから絶対安静だと言われたのに、今の私は、それを無視してこうやって走っていた。

何故危険を冒してまで私は走っているのか……。

上手く、答えられない。

割に合わない仕事なんて、傭兵と同じで暗殺者にとっても忌避すべき対象だっというのに。

——それに、不用意に本部内を移動していてあの異界人・セー

ヤと出くわしてしまつたら、バドルモア様からの命令を無視することになるのね。

だけど、命令を遵守することは別にして、妙な胸騒ぎがした。

「直感」「予感」といった勘の類だけど、私はそれをかなり信賴していたりする。

嫌な予感だ。

不穏な空気が、今も肌を強張らせている。

人殺しを生業として10年。

無数の命を奪う血みどろの世界で生き残ってきた。

勘とは、そういった緊張感と経験の中で磨き上げられた反射神経であり、鋭敏に研ぎ澄まされた本能。

その私の勘が伝えてくる。

間違いなく、夜更けのこの屋敷の中で、誰かが戦っている。

先の治療室、私ほどの手練でなければ聞き漏らしていただろう、微かに聞こえた硬質な音。

あれは恐らく、古代帝国期の魔術である「壁」^{ヘキ}で何らかの魔術を防いだ衝撃音だ。

異界人を召喚した魔術師・ロイハルトから、古代帝国期の魔術を学んで体得できた暗殺者はたった2人。

ギルド長・バドルモア様と、私・ブランデ。

西領とは異なつた象形文字とかいう部類の、”文字1つが意味を内包する”古代帝国語を完璧に思い浮かべられなければ使用できない、秘匿されし魔術体系。

膨大な文字数と同音異義語の多さがネックになって、付け焼刃の短期講習では結局私達しか体得できなかった。

また、体得と言っても私は「爆」^{バク}「斬」^{ザン}「壁」^{ヘキ}の3つ。
バドルモア様はその3つの他にもう幾つか。
はつきりいつて、少なすぎる。

戦闘技術を売りにしているというのに、冗談の様な結果だと自覚はしているけど、でも、それも致し方無いと思いたい。
線を組み合わせた図形を見せられて、「これはこういう音で、こんな意味がある」と言われて、そう幾つも記憶できるものか。

ともあれ、私の勘が正しければ、「壁」^{ヘキ}を行使したのはバドルモア様。
では、バドルモア様は誰と戦っている？

暗殺者ギルドという職種柄、敵は多い。多過ぎる。

勘のみで行動している現状で、敵を絞り込むのはどだい無理。
だからこそ、選択肢は狭まる。

暗殺者ギルドに敵が多いのは確かだけど、このレグオンが自由都市として独立を保っているのは、この街に暗殺者ギルドという抑止力があればこそ。

暗殺者からの報復は、筆舌に尽くし難い代物だ。

誰も、あの大国・エヴァルドさえこの街に、このギルドに手を出したがない。

私も何度か報復の任務で他国へ派遣されたし、他国がどれだけこのギルドを畏怖しているのか身を以て知っている。

ギルドを狙った外部組織からの攻撃ではないとすれば、残る可能性は異界人・セーヤのみ。

異界人ならば、バドルモア様を強襲する目的なんて、一つしかないだろう。

（……仇討ち目的、か。バドルモア様に単身乗り込むとか、本当、あの異界人はどうかしてる。）

身体に染みついてしまった暗殺の技術。無音での疾走。

全身を脱力させ、体重が無いイメージを脳内で仮想し、爪先だけで着地して走る。

前のめりに倒れこむ力と、前方に真っ直ぐ走る力を掛け合わせる事で、通常の走法に比べれば圧倒的に軽やかで疲労も蓄積しない。

これに魔力を付与すれば、それこそ風のような速度で走る事が出来るが、今は少しでも左腕の完治に回したいのでやめておく。

それに魔力を使わずとも、私は全身凶器なのだしね。

そういえば、この走法を教えてくれたのはバドルモア様だった。

——ふん。

過去を振り返るなんて、私らしくもない。

過去の思い出も、経験して学んだ事も、体得した技術も、生きている”今”がなければ意味が無い。

死んでしまえば価値を失うから、過去を振り返るのは死に際だけでいいのだ。

そう思っ浅く息を吐き、さらに走る速度を上げた。

音の聞こえた方向と、執務室のある方向は同じ。

ならそこが目的地だろう。

それほど広くもないギルド本部。

他の皆が寝静まっている最中の屋敷内。

何か得体の知れない焦燥感に急かされて、私は執務室へと駆けた。

息が、荒い。

今になって震えてくる脚で、僕が殺した男に近付く。

目の前の、街を見渡せる大きな窓から差し込むのは、もう沈みかけた月の光。
その光に、上半身と下半身を断たれたバドルモアの死体が照らされている。

(……死顔まで、笑ってるのか。)

始めて地下牢で会った時と同じく、僕に殺された時まで、この男は柔和な笑みを浮かべていた。

別に僕は、この男にもがき苦しんで死んで欲しかった訳じゃない。仇を討つのが目的だった。

だからどんな顔で死んでいようが、そんなことはどうでもいい。どうでもいいのに、何故か悔しくて、腹立たしくて、やりきれなかった。

——いいさ、目的の半分は果たしたんだから。

初めて…ではない。

二度目だけど、人をこの手にかけてしまった。それを後悔していないし、するつもりもない。

後悔するような軟弱な性根はもう捨てた。

戦わなければ、抗わなければ、この異世界では生き残れない。自分の身を守れない。

結局、なんでこの男が僕をこの世界に召喚したのか分からず終いだっただけ、碌な目的じゃなかったはず。

僕の持つこの力——漢字の魔法——が理由なら、この世界にとつて有益なものじゃなかっただろう。

そう考える事で、自分の殺人を正当化するつもりもないが。

自分は天才ではないのだ。

回転の速くない頭でこちゃこちゃと考えるのではなく、シンプルな目的を予め決めてから動く。

それが成功したから、例え”運良く”でも”偶然”でも成功したから、僕はこうして目的を果たし生き延びられた。

それでいい。

今後しなければならぬ事は死体からアクセサリ類を回収し、この都市から脱出すること。

追手がつかだらうから、なるべく遠くへ行き、元の世界へ帰る方法を探す。

——ああ、もう一つあった。

無意味かもしれない。けれど、ザルツ隊長達の墓碑を刻まないといけない。

彼等の亡骸がどうなっているか分からないが、あの草原へなんとかして戻りたい。

（ザルツ隊長、オルス、アックス、イリガン、僕を保護してくれた皆。……仇は、討ちました。）

床一面に広がった血や体液を避けてしゃがみ、バドルモアの左耳と喉に手を伸ばす。

……よし。

僕の手には、二つのピアスとネックレス。
これで完全に、当初の目的を果たした。

立ち上がって、未だ軽いままの自分の身体を確認する。

「ニクタイキヨウカ肉体強化」を使ってまだ5分も経っていない。

どうやって解除するのかわからないけど、むしろ今はこのままの状態がいい。

窓から飛び降りて、夜が明ける前に都市を脱出しなければ。

多分、都市の周りは壁か堀が張り巡らされているはずだから、この状態じゃないとお忍びで都市を抜け出せないだろうし。

ネックレスを見に着けて、初めて耳に穴を開ける怖さに怯えながらピアスを着ける。

不思議な事に、痛みは無かった。

「ニクタイキヨウカ肉体強化」状態だと、痛みも感じない——というより、ある

一定に達しない痛みは軽減されているのだろうか。
非常に有難かった。

バドルモアの死体を跨いで窓を開く。

その大きさの割に、思ったより軽く開いたけど、これも今の状態だからか？

腕力も上がっているのだろうか……。

ふと、ガラスに映る自分の顔を見る。

自分の顔を見るという当たり前な事。

それが、そんなことが、一ヶ月ぶりだと気付いた。

髭はもとからほとんど生えない性質なので無いが、髪は伸び、幾分やつれてこけた頬の自分が映る。

別人の様な、その顔付き。

無性に悲しくなり、涙腺が緩んだが、涙は抑え込む。

今は、前に踏み出せ。

とにかく、前へ踏み出せ。

窓からバルコニーへと出る。

外の空気は冷え冷えとして、でもかすかに暖かい。

今は、とにかく、ただただ前へ踏み出せ。

狭い助走スペースを一気に詰め、そして僕は眼下の石畳に向かってバルコニーから飛び降りた。

……え？

——
タッ
タッ
タッ
タッ
タッ

……え？

——
バ
タン
ッ

.....え？

「貫け えっ！！」

脚
ザルツ
速
肉
血
夜
オルス
草原
女
銀髪？
銀髪
女？
隅
視界

ドシュッ

光

自分

左脚に

空中

来る

こっち

光

魔法？

女

言語変換

ピアス

……っ！！！！

刺刺刺刺刺刺

自分

熱熱熱熱熱熱熱熱

左脚

痛痛痛痛痛痛痛痛

太腿

貫貫貫貫貫貫貫貫

「……っ！！……っ！！……」

左脚

激痛

バランスが

落ちる

地面に

石畳に

いくらこの状態

頭

もろに

死にたくない

死んでたまるか

「——っざけんなあああ——!!」

崩れた身体のバランスを無理やり直す。

空中で一回転！

二度と出来ない芸当を、ただ生きる一心で成功させる。

——ダンッ

「~~~~~……つつつつ!!」

軽い身体でも、それは軽いつているだけなのは、分かっていたのに。

痛みは、身体へのダメージはなくなるわけじゃない。

場違いな事に、そうやって冷静に分析している自分がいた。

「ニクタイキョウカ肉体強化」——決して、僕の身体が鉄になつたのも、鋼になつたのではないらしい。

——ブシュッ

着地と同時に、貫通痕の出来た左脚の太腿から噴き出す血。
脳天まで突き抜ける激痛。
視界が、真っ白になる。

——
タンッ

目の前に、誰かが降り立つ音がした。
バドルモアじゃないのは確か。
じゃあ、誰だ？
視界の隅に映ったのは、女だったように思う。

敵だ。

逃げ
——

「
貫
け
。」
」

7話 ギルド脱出（後編）（後書き）

活動報告の宣言を破ってしまい、申し訳ありませんでした。

2章のサブタイトルをいくつか変更しましたが、2章の各話の内容は変わっておりません。

無用な混乱を招くかとは思いましたが、これからの展開をより良くする為の措置です。

8 話 幕、下りる

衛星都市とは、大都市の周囲に点在する、小規模または中規模な都市のことである。

中核の大都市に人材・物資・貨幣を始めあらゆるモノを流し込み、また吐き出させる。

国家視点で見れば中継地点。人体でいえば内臓。

影響を与え与えられ、共生し協力し合う重要な構造。

では、西領におけるレグオンという都市は、果たして”衛星都市”に値するのか。

答えはノーだ。

レグオンは、国際的な立場としては”自由衛星都市”である。

属する国も、隣接するべき大都市もないので”衛星都市”ではない。かといって、その独立を公式に認めることは永らく西領で守られていた国家体制の”秩序”を揺るがす。

嵌める枠が無ければ、新たな枠を創るしかない。

世界大戦後、エス・レス・カーン主導による戦後会議において、レグオンは都市でも国でもない全く新しい共同体として認定された。それが”自由衛星都市・レグオン”の誕生である。

10年前に勃発した世界大戦は、かつて国家に属していた都市が”半独立”する後押しとなった。

自らの都市で十分機能していく地場産業を持つ都市ならなおさら、戦乱のどさくさにまぎれ独立を望んだ。

無論、好き勝手に独立を望んでいたのではない。

国家という体制が有益であることは事実。それゆえに人は集合する。しかし、それでも独立を目指すのには、相応の理由があったのに間

違いは無い。

強力で手堅い産業を内包する都市は、それを有する国家にとって豊潤な果实だ。

果实が搾取されるのは理であり、その搾取によってより便利に生き永らえることができるのだと、産業に携わっている者は無意識に理解している。

結果からいえば、大小を問わず多くの都市が独立に成功した。

そして僅か数ヶ月の後、独立体制が崩れ、対戦終了後の新しい西領情勢の中で、独立を果たせた都市の多くが再び元の鞘に戻っていた。

何故、各々の都市が独立を望んだか。それこそ千差万別の理由がある。

ただ、その望みの多くが叶わなかった理由は、つまるところただ一つだけしかない。

その独立を貫き通せるだけの、自衛の為の”武力”を、保持できなかったからだ。

また言い換えるなら、レグオンは暗殺者ギルドを保持していなければ、他の都市郡と変わらずに、独立を保てはしなかったのである。そこに住む人間が、ギルドに良い印象を持っていても、いなくても。

――――

深夜もまわり、もう夜明けに近づく頃。

薄ら寒い夜気と眠気にぼうつとする頭を無理やり覚醒させようと、リーシュ・マクバルは頬を叩く。

と、その叩く手が頬のニキビに当たり、鋭い痛みが走った。
”ニキビ君”という不名誉なあだ名（むしろ悪口の域）を、誰よりもリーシュ本人が気にしている。

とはいえ、こうして不意に自分のニキビに触れた時、悲しいかな、やはり自分は他人よりニキビが出来易い性質なのだと思う。

年も18を超え、レグオン自警団同期の奴等も、思春期男子特有のデキモノから卒業していく中、どうしてか自分は一向に卒業できない。

レグオン自警団に入団してはや3年目。

自分には齒木の栽培も、商人の算盤も馴染めなかった。

かといって、あの恐ろしい”人殺し”達に係わる仕事には就きたくない。

もつとも、暗殺者ギルドに属するレグオン市民自体ほとんどいないが。

リーシュがレグオン市民として働く道は、ほぼ門兵の役割しかない自警団への入団のみだった。

（あのギルドさんもいるのに、門番が必要なのかねえ…。）

心の中で溜息をつく。これで今日何度目の溜息になるのかわからない。

いや、初めてこの夜間の門番についた時から数えれば、それこそ何千何万回目がさえ、だ。

夜警はまだいい。夜間、都市の中を警邏で回るのは市民の安全を守る為に必要だ。

日中の門番もだ。毎日この都市に出入りする人間の数は千を超え、馬の数はさらに跳ね上がる。門番も百人単位で職務に当たっている。

だが、このレグオンに、果たして夜間の門番という職務が、本当に

必要なのか。

日中とは違い、夜間は立哨ではなく、都市の各門に備わった小部屋に駐在して侵入者や不審者の移動がないかを見張る。

これがレグオン自警団の中で最も忌避される職務・夜勤門番である。忌避される所以はひとえに”退屈”それに尽きる。

娯楽品を持ち込むのを躊躇うほどに退屈すぎて、もうどうしていいかわからなくなるほどの退屈さである。

外部との繋がりである巨大な木製の門は下ろされ、高さ10クリークの石造りの城壁を乗り越えでもしなければ内外部の行き来は出来ない。

閉じた門と、その横に併設された小さな駐在部屋に腰を据えての寝ずの番。小波のたたない任務。

この勤務にも手当てはもちろん宛がわれる。見方によれば、おいしい職務だ。

しかし、その手当ては言わずもがな、都市民達からの税金でまかなわれる。

有事があつてからでは遅い。

遅いが、これほどまで退屈な職務に、税金を使つていいものだろうか。

だからといって無償で行うのは嫌だというのが本音ではあるが。

（まあ、こうして平和を維持するのに使ったほうが、税金にとつても俺ら自警団にとつても本望かもな…。）

賄賂や汚職に使われるよりは。

そう思い、次の休暇をどうやって過ごそうかを考える。

妹のリズに昼食でも奢つてやるか、それとも想い人のサレアの働く酒場に顔を出して――

「こんばんは。」

リーシュの耳に、聞き慣れないエヴァルド訛りのバリトンが響く。
誰だ？！

眠気が一気に覚醒し、腰に下げられた警棒に手を伸ばす。

「そしておやすみ。―― 眠りを受けよ。」

抗い難い眠気が、彼を襲う。

ああ、何だこれは。机に突っ伏すように眠りに落ちる。
酩酊したような気分の中で、彼の口から気の抜けた息が漏れた。

――

自分の気配を断つ事で、逆に自分以外の気配が際立つ。

私が執務室へと辿り着いた時、部屋の中には気配が二つあった。

一つは…… 強烈な魔力を放つ気配。

もう一つ、このダダ漏れで制御できていないのは、間違いなく異界人のものだろう。

―― あれ？

おかしい。

バドルモア様の気配が感じられない。

私の予想では、この部屋でバドルモア様と異界人が戦っているはず。
その証拠に異界人は魔力を放出しまくっているし、相手も無しにこんなに激しい魔力を纏う説明がつかない。

バドルモア様の、気配はどこだ？

「ザmwlfifオルj；nckガン@oemjo、hjdymb
dmdhooidsne/¥w」

扉越しに聞こえてくる、異界人の声。

……くそっ。

何を口走ったんだ？

あいつを拉致する際に食らった戦術級魔術で、私がロイハルトからもらった『遺産』のネックスは吹き飛んでしまった。

もともと御釈迦になりかけで、バドルモア様やアーニヤの保存状態が良かった物と違ったから耐久性も低かったのだろう。

拉致する際に自分の言葉が通じれば良いだけだったのでネックスのみを渡されたし、私自身もそれで納得していたが、この状況ではアーニヤに渡されたピアスが猛烈に欲しい。

——え？

待て。

待て待て待て。

この、漂ってくる臭いは何だ？

懐かしい臭い。嗅ぎ慣れた臭い。

鉄錆びと、内臓粘液、そして糞尿が混ざり合った臭い。

まさか。

まさかまさかまさか。

瞬間、私の身体は。

暗殺者となつてから初めて、我を忘れて動いていた。

――――

「貫け。」

右脚。

「貫け。」

左腕。

「貫け。」

右腕。

声にならない叫びを上げながら、異界人がのたうつ。
こいつは、この異界人は、私達の首領を殺した。

普通なら問答無用で即殺すべきだ。

私個人の感情で語るならば、今すぐ、その脳天に孔を開けてやりたい。

——でも、駄目なのだ。

こいつはバドルモア様が計画成就の為に召喚した、純粹な意味で古代帝国期の魔術を操る事が出来るであろう、唯一の人間。殺しちゃいけない。

私が、バドルモア様が描いた計画を潰しちゃいけない。もう一度拉致して拘留しなければならぬ。

バドルモア様亡き後の問題は山積み必至。

後継者問題に、バドルモア様独断のこいつを利用した世界大戦の進退に、首領の死を隠蔽する工作他と数え上げればキリが無い。だから、殺しはしないよ。

「眠りを受けよ。」

眠らせて回収する。

私の魔術が異界人へと走った。

「……っ、へ、壁^{ヘキ}っ！」

——パシユン

……。

……。

……へえ。

あくまで、抵抗するのか、異界人。

前回よりはキツく痛めつけたし、それで済ませてあげようかと思っていたのに――

まだ戦うつもりだ。そんな目をしてる。

簡単には捕まってくれなさそうだ。

私の仏心からの魔術も拒まれた。

いいね。

その意気込み。覚悟。根性。

私は嫌いじゃないよ？

だけどね。

私達の首領を、私に暗殺者として生きる術を叩き込んでくれた人を殺したんだ。

飼い犬に手を噛まれるどころか、この飼い犬は主人を噛み殺した。

相応の苦しみを私情で与えるくらい誰が咎める？

プロ失格と言われても仕方がないが、自分の首領が殺されても無感動な程、私は忠誠心が薄い人間ではない。

そのギリギリの心境の妥協点で、眠らせることでこれ以上の苦痛を与えまいと思っていた。

けれど駄目だね。

こいつは、今のこいつは、徹底的に痛めつけてその頑強な意志を砕ききるしかないようだし。

お前を拉致したエレス平原の時のように、この憤りを、このやり切れなさを、精々八当たりさせてもらおうとする。

「貫け。」

異界人の左脚に、二つ目の孔が開く。

また異界人が、声にならない絶叫を上げながら私の目の前でのたうつ。

こいつは分かってないんだ。

バドルモア様を殺したってことの重大性を。

暗殺者ギルドの首領を殺せたっていう自分の重要性を。

異界人だから、こいつは分かり得ない。

——まあ、いい。

のたうち回る異界人の口を右手で塞ぎ、持ち上げる。

こうなったら、顎を砕いてしまおう。

声を出させなければ、古代帝国期の魔術も行使できない。

そうすれば古代言語で詠唱する事が出来ないし、当分の危険因子も減る。

だから、この場で、顎を砕いてやる。

こいつは異常だ。

通説が通用しない、何か特別な異界人だ。

いきなり魔力を顕現させたことといい、私の左腕を爆ぜ飛ばした魔術、バドルモア様を殺した魔術といい、ロイハルトから聞いていた異界人の特徴と一致しない。

魔力を使える特別な異界人且つ古代帝国期の魔術を行使できるからこそ、顎を砕いておくのは正しい判断のはずだ。

誰が想像するというのが。

侮るまでもないズブのド素人に、西領に悪名を轟かす最高の暗殺者

が殺されるなんて。

私達の常識が通用しなかったただけだとしても。

この異界人を”異界人だから”という先入観で取り扱っていたから
だったとしても、それでも――

右手に力を込める。

傷の痛みも気にせず、異界人が両脚をばたつかせるが、鍛えこん
だ私の腕力に勝てはしない。

魔力を身体に付与せずとも、私の右腕一本で宙に浮かせられるほど
に貧弱な異界人。

こんな貧弱な奴に、バドルモア様が――

……めり……めり……めり……めり

おかしい。

「ニクタイキョウ肉体強化」状態なのに、いくら力を込めても相手に勝てない。

腕力は、変わってない……？それとも強化された自分の腕力以上に、
相手の力が勝っている？

激痛で視界も意識もはつきりしない。

けれど、相手が僕の顎を砕こうとしているのだけは分かる。

痛みを無視して、両手で、口を塞ぐ相手の腕を掴む。

なんなんだこの力。

人間か？人間の皮を被った化け物なんじゃないのか？

顎が、軋む。

宙ぶらりんで、負荷がかかる首が悲鳴を上げる。

千切れて、砕ける――

駄目だ！！諦めるな！！

顎を砕かれたら、魔法が使えなくなる。

生きる術を失う。抗い、戦う術を奪われてしまう。

両手に力を込め、鼻呼吸で必死に酸素を体内に取り込んだ。
冷静になれ。

焦らず、しっかりと状況を把握しろ。

ぶれる視界を、焦点を戻す。

少しずつ、僅かに戻り始めた焦点。

視界に、夜闇の黒色ではない鮮やかな”銀色”が飛び込んできた。
夜風に舞う、銀の長髪。

——銀の、髪？

屋敷二階から着地する直前、空中で相手に攻撃された時に、頭の中
をよぎった考えがフラッシュバックした。

突然思い出す、あの夜の草原。襲撃者の言葉。

（静カシナサイ、騒グダメデス、コノママ骨折リマス、イイデス？）

目を、相手にしっかりと向ける。

（アナタノセイ、私傷ツキマシタ。凄イ痛いデス。誰ノ、セイデス
？）

——ああ。

こいつだ。間違いない。忘れもしない。

何故生きてるのか。バドルモアは嘘を語っていたのか。腹の奥底に、脳の深奥に残っていた真の仇への憎悪が、じわじわと溢れ出す。

この女が生きていた理由など、どうでもいい。

この女は、僕を追う。ここで逃げ出しても、絶対追って来る。だから、この場所で絶対に殺す。

夜の草原を思い出せ。

あの時の悔しさを思い返せ。
無力だった自分とは違うぞ。
今は、戦う力があるんだ。

スペースを。

声を出せる、隙間を。

もう少し。
あと少し。

唇が、女の掌から、離れた。

今欲しいのは――

蚊の鳴く様な、か細い声だった。
でも、それで充分だった。
熱が、僕の口の中から生まれた熱が、両手に集中していく。
湧き出すように、力が漲っていく。

爆ぜろっ！！！！

「バ「残念でしたあ！」」

——ズダンッ！！

小賢しいまねをしてきた異界人を、口を押さえ直して思い切り石畳に叩き付けた。

また「爆^{バク}」で私を爆ぜ飛ばそうとしたんだろうけど、二度目は食らわないよ。

それが玄人つてものだ。

なあ、初心者^{ビギナー}。

私が左腕の為に温存していた魔力を”ほんの”少しばかり右手に割けば、お前の抵抗なんて意味を成さなくなるんだよ。

その程度なんだ。

バドルモア様に勝てたのは、天上の神・アンセヴェルの気紛れだろ
うさ。

……ん？

こいつの身に着けているアクセサリーは——ロイハルトが、バドルモア様に渡していたもの？

私が渡された、半分御釈迦に成りかけだった物と違って、保存状態が良かった物だね。

成程。バドルモア様を殺したのは、仇討ちだけじゃなくてこの言語変換機も目的だったのか。

じゃあ、今のこいつには会話が通用するはず。

「異界人……セーヤ、だっけ？」

異界——セーヤが、こちらに目を向けた。

デジャヴを感じる。

ああ、これはあの時と。

こいつを拉致した、エレス平原の時と同じ状況なのだ。

「言いたい事は沢山あるんだけどさあ。……まあ、あれだよ。」

お前は。

「もう一回。」

あの夜のように。

「私の”八つ当たり”を受けな。」

心を折ってやる。そして顎を砕けばいい。

私の経験則ではあと一発。セーヤに魔術を放てば確実に心が折れる。反抗すら出来ないほどに、ね。

ぞわりと、嗜虐心を満たす快感が身体を走る。

視線を、セーヤの右腕の既に穿った傷跡へ。

新しく開く傷の痛みと、同じ箇所をまた抉られる痛みは、どっちが痛いかな？

どっちも痛いけど、より痛いと感じるのはどっちかな？

魔力の方向は定まった。

「壁^{ヘキ}」で防がれないように、さらに掌を唇に密着させる。

滅茶苦茶に身体を暴れさせ、抵抗するセーヤ。

その抵抗を黙らせる為に、もう一回石畳に叩き付けた。

「じたばたしたって、もうあの時の兵士達はいないんだよ。お前の味方なんかいないのさ。」

半月の様に口元を歪めさせて微笑んだ女が、死刑宣告のように、口を動かす。

ズキズキと痛む後頭部。「ニクタイキョウカ肉体強化」状態じゃなかったら、痛みで気絶していたかもしれないかった。

——もしかしたら、その方が良かったかもしれない。

抵抗を強制的に止められた両手が、薄汚れた石畳に触れる。またか。

僕は、またこいつに一指報いることもできずに、いいように蹴られるだけなのか。

人がそうすぐに変われないのは当たり前だけど。でも、これはあんまりじゃないか。

何を絶望してるんだ、セーヤ。

偶然は、幸運は、奇跡は、さっき使ったんだろう？

だからこういう事になって、お前が絶望するのは当然なんだ。

だから、「まだ打つ手はあるのに」って絶望するのはお門違いだろう？

ここで、お前が感じるべきものは、当然感じるべき絶望感なんかじゃない。

ただ、一つ。

諦観一択なんだよ。

「貫け！」

女が、叫ぶ。

偶然も、幸運も、奇跡も。

起きないからそう呼ばれる。

援軍無き籠城戦が無謀であるように、味方がいなければ自身がピンチの時に誰が助けに駆け付けてくれる？

自分に味方はいない。

唯一味方と呼べたザルツ隊長率いる部隊は壊滅し、唯一抗える魔術も口を塞がれて行使できず。

少なくともこの状況で、僕に味方はいなかった。

でも、こんな状況で折れかけた心を食い止めてくれたのは、まぎれもなく”もういないザルツ隊長達”なのだ。

いないから、初めから頼ろうと現実逃避すること自体が、愚かなんだ。

こんな状況でも、諦めてたまるか。僕は生き残った。あの夜、オルスが、ザルツ隊長が、捨て身で僕を守ろうとしてくれた。

あの二人の行為を、冒涇することだけはしたくない。

右腕の、”既に空いた傷口”に再び差し込まれる攻撃。

筆舌に尽くし難い。

この世に、こんな痛みがあったのかと。痛覚でショートしかけた脳が、それでもこうして考え事が出来る程度もっているのは、「肉体強化」^{キョウカ}の賜物だったのだろう。

——いいさ、くれてやる。

もう何回攻撃されても、傷付けられても同じだ。
甘んじて攻撃を受けてやる。

でも、甘んじるのはこれっきりだ。

無理に力を入れるから、相手も力を入れる。

脱力しろ。これはチャンスだ。女の拘束から抜け出す好機。演技を打て。心が折れた、そんな演技を。

脱力し、一切の抵抗を諦めた”かのように”身体を弛緩させる。

わざと虚ろにした視線の端で、得意満面な笑みの女の顔が映る。

鋼の硬さをした悪魔の手が、僕の口から離れていく。

鼻息をコントロール。絶え絶えにしる。思い出すのは、もう半月以上も前。

最初にいた森の中、さまよい歩いた飢餓の時の自分の呼吸。

その微細な演技さえも、この女への反攻への足懸かり。

異義であるにも係わらず、閉じた距離が那由他の如く感じられた、塞いだ女の手と塞がれた僕の口。

その距離が離れていく。口と手の平に空く空間。音の波を生じさせられるだけの間。

自分の発した声は、驚くほど小さなものだった。

「――――^{ザン}斬。」

どこを狙ったわけでもない。ただ願っただけだ。

この女に必殺の一撃を、と。

願いは叶う。

驚愕と、信じられないという心情を吐露した女の表情。そして紡がれた言葉。

「馬鹿な――――。」

ブツン、と、太いゴムが切れるような音がしたように感じた瞬間。
女の身体の、僕に近かった部位——右手・右腕・右足・右脚が
根こそぎ切断され、真っ赤で暖かな血飛沫が僕に降り注いだ。

――――

いかに痛み能耐性を持つ暗殺者といえど、痛いものは痛い。
痛覚を克服できるわけなんてない。感覚を潰すという事は禁忌だ。
ただ一般人より、痛みを隠すのが上手いというだけ。
だから、ここまで清々しい痛みを感じたのは久しぶりだった。左腕
を爆ぜ飛ばされた時とは別種の痛みが走る。

この異界人に二度までも傷付けられ、そのどちらもが致命傷。

……まったく。

一体、この異界人は——セーヤは何なんだ。

どれだけ痛め付けても、大の大人やプロの戦士が心折れてもおかし
くない行為を与えられても、こいつは決して諦めない。

まるでアンデッドだ。御伽噺の生ける屍の如く、私の予想を覆す。
破壊する。

右の腕から脚から根こそぎ切断されて、バランスを取れなくなった
私の身体は崩れ落ちていく。

崩れ落ちる瞬間、セーヤの瞳と私の瞳が交差する。

はっ。

なんて表情をしているんだ。

なんでそんな、”後悔しているような”表情をしているんだ。ふざけるんじゃない。

ここまでやつといて、そんな女々しい顔をするんじゃないよ。胸を張るんだ、初心者^{ヒギナー}。

あんたは、西領の裏世界に名高い「レグオンの100人殺し」を。あの隊長達の仇を討ったんだから。

私を殺した男の顔を見ながら、視界は徐々に暗くなっていく。最後の瞬間、脳裏に浮かんだのは、何故かパズ的笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3678o/>

Long time no see

2011年3月30日19時47分発行